Bulletin

292
2022 夏号

施設設計を考える 1

福祉施設の今、これから

ひろば
連載：新型コロナが変えた仕事のスタイル　第1回
覗いてみました他人の流儀
海外レポート
第33回JIA神奈川建築WEEK　かながわ建築祭2022
未来へ継承したい風景
良質な建築、これからのまちづくり
連載：弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第1回
温故知新
活動報告
建築ウォームアップ
卒業設計をふりかえる
次世代のタマゴたち

公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部

フジモリ産業㈱ 建材事業部 建築営業統括部
構造資材課 課長　西野嘉一氏

大空間を実現するボイドスラブと音環境の情報発信や製品開発にも注力

フジモリ産業株式会社は、1951（昭和26）年にアスファルト製のタイルを販売するフジモリ建材株式会社として設立。現在は、建築・土木資材の製造・販売・工事に加え、食品の包装資材や医療現場で使用する化成品などを取り扱っています。建材では、設備スリーブや丸柱の型枠などに使われている建築用の紙管「フジボイド」をはじめ、建築資材、構造資材、設備資材を幅広く展開。設計者や利用者の要望に応えながら、時代にマッチした商品の開発に力を入れています。今回は、ボイドスラブとプレキャストコンクリート製品、また音環境への取り組みについて、西野嘉一氏にお話をうかがいました。

意匠・構造・現場のニーズに応えるボイドスラブ工法

当社は、建物の規模や意匠・構造・現場からのさまざまなニーズに合わせたボイドスラブを取り揃え、設計から構造解析、施工、納入までを一貫して行っています。

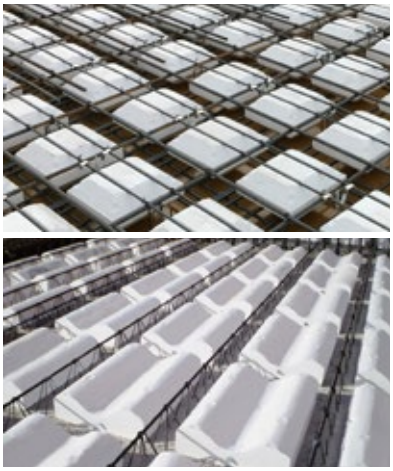
当社のボイドスラブは、ボイド型枠を現場で据え付ける在来型と、工期を短縮できる工業化工法のハーフプレキャスト型の2つの工法があります。

在来型には、軽量化と施工性が特徴の「FLボイドスラブ」、遮音性能に特化した「打込みサイレントボイドスラブ」、スパイラル管で大スパンに対応する「フジスラブ」などをラインナップ。ハーフプレキャスト工法は、「FSボイドスラブ」など、在来型の性能に加え、高品質を確保し、工期短縮や省力化を実現します。庁舎や集合住宅、再開発事業など、さまざまな用途の建物に採用されています。

柱、梁、バルコニーなど躯体プレキャスト製品も提供

プレキャストコンクリートは、床板に限らず、柱、梁などの躯体や、バルコニー、階段、腰壁などの2次部材まで、さまざまな製品を提供しています。現場とプレキャスト工場の間に入り、作図やコスト・工程・品質管理から納入までをワンストップでサポート。ユニット鉄筋や荷揚げ開口の補強筋ユニットなども取り扱い、設計者のニーズに応えながら、現場作業の省力化と品質向上を提案しています。

ボイドスラブのフラットな居住空間イメージ



上：FLボイドスラブ　下：FSサイレントボイドスラブ

2021年には高強度鉄筋MK785を用いてプレストレスを導入したスラブ工法を開発し、日本建築総合試験所の技術証明を取得。現在も技術開発を進めています。

外部騒音を低減し快適な住環境を実現する

室内の音環境に関する研究・発信や製品開発にも注力しています。床衝撃音研究会に所属し、集合住宅などを設計する時に、音環境上配慮すべき点やスラブの予測計算などを解説した冊子を配布。床衝撃音レベルを予測計算できるExcelシートは、当社ホームページから無償でダウンロード可能です。

また、ボイド型枠を波型にすることで共振を抑制する「サイレントボイドスラブ」を2001年頃から展開しています。今年1月には型枠に新たな波型を加えることで、共振抑制効果を発揮しつつスラブ重量軽減を実現した「サイレントLFR」を発売。スラブ厚は適用範囲を拡げ230mmから対応可能です。

その他にも、住人の歩行音や生活音に対して給気用スリーブ内に周波数調整バルブを取り付け背景音を付加して音を消し合う「コンフォートファンシステム」などを用意。メンテナンスフリーで、内外装の意匠にも影響せず取り付けられます。

今後もお客様のご要望に応えながら、革新的な製品の開発を目指します。

fujimori フジモリ産業株式会社　https://www.fujimori.co.jp

建築・土木工事用資材の製造・販売ならびに工事。
プラスチック原料・製品ならびに関連機械の国内販売および貿易。

フジモリ産業
ホームページ➡

本　　社　東京都新宿区西新宿1-23-7 新宿ファーストウエスト10F
TEL：03-5339-8540　FAX：03-5908-0283

■床衝撃音レベル予測計算シートは当社HPより無償でダウンロードできますのでご活用ください。
https://www.fujimori.co.jp/form_impedance

Bulletin
292
2022 夏号

目 次

● 特 集

4 施設設計を考える 1
福祉施設の今、これから

4 子ども施設 子ども向け過ぎない幼保建築の必要性 相坂研介設計アトリエ 相坂研介
6 療養支援施設 生きる場所としてのこどもホスピス 岡田新一設計事務所 津嶋 功
8 老人福祉施設 地域に開かれた生活の場づくり 佐藤総合計画 上田俊三
10 障害者施設 ごく普通の生活を営むこと 創建築事務所 徳田義弘

● ひろば

12 **連載：新型コロナが変えた仕事のスタイル 第1回**
テレワーク環境での生産性アップの仕事術 スタジオネオ 伊波サチヨ
14 **interview：覗いてみました他人の流儀**
秋山利輝氏に聞く 丁稚制度で一流の家具職人を育てる Bulletin編集WG
16 **海外レポート** そとに暮らす ―ベトナムにみる屋外空間の魅力― Sanuki Daisuke architects 佐貫大輔
18 **第33回 JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2022**
未来へ残すもの、変えてゆくもの 八板建築設計事務所 八板晋太郎
20 **未来へ継承したい風景** 残したい世田谷の風景 青野設計事務所 青野達司
22 **良質な建築、これからのまちづくり** 土木と建築の協働、その可能性を探る 日本設計 近藤 崇
23 **連載：弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第1回**
施主と設計者のコミュニケーション 山崎哲法律事務所 安藤 亮
24 **温故知新** 夏目漱石が建築家になっていたら 河野進設計事務所 河野 進
25 抱負を語る 階段の構造 Atled 構造設計室 小倉直幸
抱負を語る 環境をつくり持続させるコモンズ teco 金野千恵
26 **活動報告** 交流委員会 2021年度の活動を振り返って 蒼設備設計 相野谷誠志
28 **建築ウォームアップ ―建築のはじまりかたを探る―**
建築主の声を聞き逃さない、想いを汲み取る アトリエ24 飯沼竹一
29 **卒業設計をふりかえる** 流れる糸 片倉隆幸建築研究室 片倉隆幸
30 **次世代のタマゴたち**
これからの挑戦 芝浦工業大学建築学部 新村恵太
自身への手紙から 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 榎本海月

● あとがき

31 広報からのお知らせ 『Bulletin』編集長退任挨拶／新任挨拶
31 編集後記

2 **パートナーズアイ** フジモリ産業株式会社 大空間を実現するボイドスラブと音環境の情報発信や製品開発にも注力

表紙画像：上、「あまねの杜保育園」設計 相坂研介設計アトリエ （撮影 小川重雄）
下、「朝老園ひさみつ」設計 佐藤総合計画

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹ Fax：03-3408-8294
https://www.jia-kanto.org/

福祉施設の今、これから

子ども施設

子ども向け過ぎない幼保建築の必要性

相坂研介設計アトリエ
相坂研介

我々が最初の保育園を計画し始めたのは2013年。2003年に「少子化社会対策基本法」が成立後、2012年にようやく「子ども・子育て支援法」にて施設型給付などの経済的支援が決定し、各自治体が一斉に具体的な施策を始めた直後である。それから10年の間、私が関わってきた郊外・地方・都心の3つの子ども施設について、地域や敷地、条件や要求の違い、結果としての特長の違いを紹介した上で、3件に共通して考え、大切にしてきたことを列挙し、「社会の変化を背景にした福祉施設のこれからのあり方」というテーマについて答えるものとしたい。

あまねの杜保育園

（2013～2015／千葉県船橋市／定員160名／鉄骨造2階建て）

外に閉じ中は開放性と回遊性

自然の恵みを感じられる中庭

元国有地を市が分割貸与する民設民営の5種類の福祉施設が計画され、我々は保育事業者の設計者として参画した。異年齢保育、食育推進、環境負荷低減、自然との触れ合い、豊かな感性や想像力を育む園舎が求められた新設園である。敷地は県道と駐車場に囲まれるため外には閉じつつ、風を通すため所々に半円形の坪庭を設け、園児の視線が向かう各中心に樹木を植える。そうした外周の木々と中庭の山や池、屋上の畑を周るようにデッキ、スロープ、階段やブリッジを巡らせた。室内も設備にはなるべく頼らず、地熱や雨水、太陽光を活かしている。

「あまね」とは「周」の読みの1つで、さまざまな自然の恵みを周く感じさせたい園の想いと、中庭を周る建築の特徴を全て表している。

誰にも行けない場所のない環境が評価され、さまざまな身体的特徴をもつ「foorin楽団」が歌うNHKみんなのうた「パプリカ」のMVのロケ地に選ばれた。

てぞーろ保育園

（2017～2019／福島県福島市／定員90名／木造2階建て）

車路を残しながら2階を張り出す

遊具を兼ねた建築の屋根や壁

住宅ほどの小規模保育所を運営していた園長から隣地に増築を依頼された。建主は当初、窮屈な3階建てを想定していたが、少子化の進む地方で将来淘汰されない魅力的な環境を整えるため、敷地のとり方から逆提案した。具体的には、事業者の私道を敷地に合筆し、地表は車路のアクセシビリティを踏襲しつつ上階は合法的に道路上建築を行い、広く整形な庭と平たく広い2階建てを両立させる。これにより歩車分離や避難安全性が成立するばかりか構造を準耐火にでき、厳しい予算をさまざまな外部空間にも配分できた。

建築は、雄大な信夫山の景観を取り込むべく西に閉じ東に開かれ、滑り台やボルダリング壁のとりつく巨大遊具のような立体的な園舎に、侵入や視線を制御する穴の開いたグレーの帯が上下しながら巻き付く構成。

「てぞーろ」とは「宝箱」を意味し、竣工後2度の大地震を経ても損傷なく地域の宝＝子どもを守り続けている。

東立石保育園

（2018～2021／東京都葛飾区／定員165名／RC造3階建て）

浸水も想定される下町の密集市街地に建つ保育園。老朽化した区立既存園を民営化するプロポーザルで選定された。

p.4、5の写真すべて撮影：小川重雄

浸水の恐れのある下町の敷地

避難と待機のできる段状の屋上

過去を引き継ぎ、現代の要求を満たし、未来の子どもに愛され、地域に頼られるよう、皆が安らげる「家」、体と心を育む「公園」、さまざまな発見のある「学び舎」、災害時には地域の拠り所となる「砦」をも兼ねる建築を提案した。

構造は水圧を受け流すRC壁柱が支え、最高高さ10m未満に3層を収めつつも、ほとんどの保育室を想定水位より70cmも高い2階に持ち上げて水害に備えた。近隣住戸への配慮から隣接公園のみに開いたC型平面とし、立面は街並みに合わせて分割。1階前面道路側はセットバックして自転車や車の渋滞、事故を回避する。水害・火災時で上下へ逃げ分けられる外部動線のうち、屋上へのスロープや大階段は年齢に応じた天井高や備蓄庫を生み出すとともに、園児と職員、地域住民を含めた数百名が、腰掛けながら救助を待つことができる設えとしている。

共通して考えてきたこと

①安心してくつろげる環境

保育園は、預けられた子どもの長い1日の生活全てを支える第二の家といえる。車や侵入者から守り、騒音も防ぐべく外にはある程度閉じつつ、内には採光・通風や開放感を取り込むような、敷地ごとの境界の調整も住宅的であるといえるし、内部も派手な色彩で子どもっぽさにすり寄るのではなく、くつろぎや落ち着きを感じさせる内装を心がけている。

②回遊性と変化に富んだ空間

屋根まで含む建築の構成要素を全て遊具に見立て、外廊下や大階段、ブリッジやすべり台で立体的に結び付けたり、陰／日向、高い庇／低い軒、坂や丘や窪みなどの変化をつけて、身体の発育も促せるような工夫をしている。行き止まりのない回遊路は、子どもが飽きないだけでなく、保育士も見守ったり駆け付けやすく、さらに普段から隅々まで走り回っていることで、非常時にも複数の避難経路があることが自然と身に付くため、安全上も非常に有効である。

③敷地内外に学びのきっかけ

山や川や桜並木など、周辺から活かせるものは全て活かし、学びに繋げている。敷地内でも、生物を観察できたり、野菜を育てられたり、調理室を覗けたり、建築自体が園児の発見や体験に寄与する。また、庇で日射を防ぎ、坪庭に風を抜き、給気を地熱で冷やし、雨水タンクと太陽光発電で池の水を循環させるなど、単に省エネに努めるだけでなく、自然の力がそうして活用される様子や仕組みをそのまま子どもが常に目にし、学べるように配慮している。

④モノの名前を覚えられる、素材感を残した仕上げ

仕上げは、初めて知るモノの名前を全て“本物を通して”覚えてもらおうと、「木は木らしく、セメントはセメントらしく」、手摺の鉄から池底の石まで素材感を残す使い方を徹底している。我々は子ども施設だからといって赤青黄などの原色は使わず、替わりにさまざまな空間特性と環境の掛け合わせによる「原色以上に楽しく、コントラストの強い空間体験」を立体的に凝縮することを重視している。

⑤大人（保育士および保護者）にも同等の配慮

園児の声を吸収する天井の吸音板、隣室・対岸同士を視認し合える内窓や中庭配置、事務室と調理室を向かい合わせて死角を補うプランなどで、保育士の負担を減らす。また通り抜けられる広い玄関土間、深い庇付きの外廊下の動線は、忙しい保護者を、朝の混雑や雨から解放するなど、子どもだけでなく関係する大人全員のストレス軽減も目指している。

⑥将来を見越した幼老転用性

学んで、遊んで、食べて、仮眠するという空間構成は、リハビリ室、娯楽室、食堂、休憩室をもつような、老人保健施設と酷似している。待機児童解消のため施設増補が急がれた10年前から、少子化による保育所の需要減少と、代わりに増していくであろう老人施設の需要を見据え、計画当初から各事業者には「幼老転用」の可能性を説明し、設計上の共通した裏テーマとしてきた。

3つの園とも、保育室内は小空間や造作家具など、あえて必要以上につくり込まないようにしているが、このことは保育士独自のクラスづくりの自由度を残す目的以外に、将来への転用性を意図している。

幼保施設は、乳児から大人までの寸法規格の大きな差異だけでなく、園児の冒険心と安全性、街への開放と防犯性、日常の親近感と非常時の堅牢さなど、特に多くの相反要素を調停していくべき設計対象だと思われる。地域性や時代性、もちろん園ごとの特色などに合わせたきめ細かな調整が必要とされるが、それこそが設計上の醍醐味でもあり、さらに個人的には建築家として、“子ども施設”であることに逃げずに、1つ1つきちんと“建築”をつくることを大切に考えている。

療養支援施設

生きる場所としてのこどもホスピス

―横浜こどもホスピス「うみとそらのおうち」―

岡田新一設計事務所
津嶋 功

こども家庭庁が令和5年度開庁に向けて動き出した。縦割り行政の狭間を埋める医療、福祉、教育を横断的に繋ぐ子ども目線の仕組みづくりが期待される。病気であっても、親と一緒に過ごしたい、友だちと一緒に遊びたい、学びたい、成長したい、生きたい、そのような当たり前の生活の実現を目指して横浜こどもホスピスプロジェクトは始まった。

子どもに対して、ホスピス？

「ホスピスって死ぬところでしょ？ そんなところに私の子どもを行かせられない！」。我が子を看取ったお母さんの言葉。「こどもホスピス」と聞くと、多くの方が同じようなイメージを浮かべるのが現状ではないだろうか。しかし、このお母さんはいま東京にこどもホスピスを立ち上げようと奔走されておられる。

生きられる場所として

子どもは成長する。病気があっても。5歳の子どもにとっては、たとえ余命半年だとしても自分の人生の1割というとても大きな意味を持つ。残された人生ではなく、これから生きる時間なのだ。こどもホスピスは、そういう子どもと家族の生きられる場所でありたい。

生命を脅かされる病気を伴う（LTC：Life-threatening condition）子どもは、国内に約2万人と推定される（2019年時点）。治療の進歩により小児がんの生存率は70～90%まで達しているが、寛解後も再発や合併症リスクを抱え、治療が困難な状況にある子どもはがん性疼痛や治療の痛みに耐えながら、不安や恐怖とともに暮らしている。家族にとっても、生活の全てが子どもの治療中心になり、社会との断絶、孤独を強いられる現状がある。

制度の狭間

小児慢性特定疾病には児童福祉法に基づく国からの医療費の助成や、障害者総合支援法に基づく障害福祉サービスなどの支援があるが、それぞれ18歳未満、18歳以上という制限がある。また医療を施す場所については「医療提供施設又は患者の居宅等」と定められている。LTCの子どもが18歳以上になったらどうなるか。治療が困難な子どもは退院したらどこに行くのか。その時、家族の居場所はどこにあるのか。

横浜こどもホスピスプロジェクト

2014年、横浜こどもホスピスプロジェクト（当時設立準備委員会）の田川尚登（ひさと）代表理事より「大きなあったかいおうちをつくりたい」という思いを伺った。田川さんは1998年に当時6歳の次女を悪性脳腫瘍で亡くされている。余命半年と告げられて呆然とするなか、残された時間を家族と大切に過ごされた。親子で家族一緒に過ごせる場所をつくりたい、それが我が子の生きた証であり、残された自分の使命であるとおっしゃった。

フリースタンディングの試み

本プロジェクトの発端は看護師であった石川好枝さんの遺贈寄附による。その精神を引き継ぎ、医療の枠を超えた全人的ケアを目指す。患者本人だけではなく、亡くなった後の親きょうだいの精神的支えなど、今の医療、福祉の制度ではまだ限界がある。

純粋に制度に頼らないこどもホスピスは、TSURUMIこどもホスピス（2016年）が国内最初であり、横浜こどもホスピスプロジェクトは2例目となる。

医療・福祉施設でもなく、自宅でもなく、子どもと家族が安心して過ごせる場所とは？

認定NPO法人横浜こどもホスピスプロジェクトと横浜市立大学医学部看護学科佐藤朝美教授らと合同で遺族調査アンケートを行った（2019年、2020年）。全国の小児がんの遺族117名へ質問用紙を配布し58名より回答をいただいた。

アンケートの結果、子どもの療養生活の場所は「一般病棟」78%、次いで「自宅」57%（複数回答）、余命宣告後に親が望んだ子どもの療養生活は、「子どもに大好物を食べてほしい」「家族きょうだいとこれまでと変わらずに過ごしたい」という回答が多かった。また親が子どもにしてあげられたら良かったこととして「安全にお風呂

平潟湾に注ぐ侍従川河口を望む「うみとそらのおうち」

1階 みんなのホール

に入れてあげたい」67%という回答があった。これらの結果をもとにNPO法人正会員で構成された専門委員にて設計条件を検証し、「みんなで一緒に過ごせる場所」「家族で一緒に入れるお風呂」をメインテーマとした。

「うみとそらのおうち」(横浜こどもホスピス)

2019年横浜市より、市有地を活用した生命を脅かす病気の子どもと家族の療養生活支援施設の整備・運営を行う事業者が公募され選定された。これにより市有地の無償貸付(30年間)と事業費の一部補助(開所後5年間／年間500万円を上限)の助成を受けている。

建築概要 1階RC造＋2階木造、延べ面積499.79㎡、敷地面積727.65㎡

1階はみんなで過ごせる交流エリアとし、オープンキッチンで一緒にご飯を作ったり、ブランコで遊んだり、クリスマス会を開いたり、小児緩和ケア等のセミナーを開いたりできるオープンスペースである。地域にも活用してもらえるよう開放的な運営を行う。

2階はくつろぎのエリアとし、家族で過ごせる部屋2室、家族で入れる浴室1室、ミストサウナ＋シャワー付き部屋1室、プレイスペースを配置する。

運営体制 常勤5名＋非常勤1名、うち看護師3名、保育士(チャイルドライフスペシャリスト資格有)1名

計画の内容

前例の少ない設計であり、海外事例の現地調査を2018年、2019年にNPO法人事務局とともに行った。特にフランシス・ハウス(イギリス・マンチェスター)とレーゲンボーゲンランド(ドイツ・デュッセルドルフ)には設計から運営に至るまで詳細な情報提供をいただいた。

建築計画として次の2点に注意を払った。

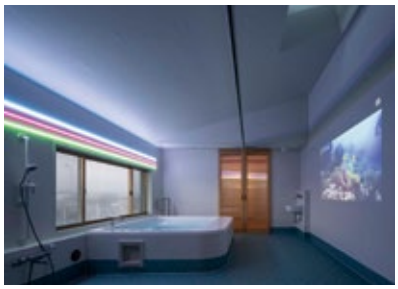
①療養環境のプライバシー

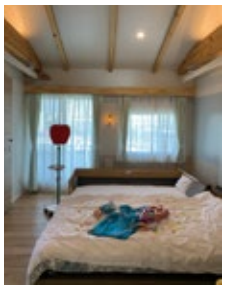
浴室をプランニングのテーマにしたことから、子どもの居場所である「部屋」と浴室を直結させ、2室の部屋の間に浴室を挟んだユニットとした。

お風呂は重力からも開放されリラックスできることから、センサリールーム(スヌーズレン)として感覚を刺激する設えとした。湯船から海が見え、天窓から陽の移ろいを感じ、映像音響を楽しむことができる。

②どんな子どもも成長すること

成長するということは体重が重くなるということである。家族(介護者)の負担を軽くするため天井から吊り下げて水平移動できる走行リフトは必須である。浴槽の形状については、大きさ、深さ、縁の幅などについてモックアップを作成し、横浜市立大学医学部看護学科、訪問看護師および近隣の訪問看護ステーション看護師の協力を得て人形を用いた検証を行った。これにより気管切開などの医療デバイスのある場合や、子どもを抱っこして入浴する場合の安全性の確保など有意義な結果を得られた。


2階センサリールームを兼ねた浴室


2階浴室と接する部屋

地域とともにあるこどもホスピス

本プロジェクトは横浜市の事業であるとともに、多くの地域民間企業に支えられている。地元地方銀行や製薬会社のCSR活動の一環として、また外資系企業のチャリティイベントなども根付きつつある。

ボランティア登録は195人を数える。庭の維持管理、清掃、裁縫、広報翻訳などボランティアの支援活動がこどもホスピスの存続を支えるとともに、地域のコミュニティを新たに育んでくれることを期待している。

参考文献：田川尚登『こどもホスピス』(新泉社、2019年)、下道知世乃・藤塚真希・佐藤朝美・佐藤貴虎「余命宣告を受けた小児がんの子どもの家族が望む療養生活と要因の調査」『日本看護科学学会学術集会講演集』(40, 287)(2020年)、藤塚真希・下道知世乃・佐藤朝美「子どものEnd of Life Careニーズとこどもホスピス」『小児看護』(43(11)1358-1362)(2020年)

老人福祉施設

地域に開かれた生活の場づくり

― 朝老園（ちょうろうえん）ひさみつ ―

佐藤総合計画
上田俊三

高齢化社会を迎えて

田園風景の中で国道と町道に接するロケーション

福岡県筑前町は筑紫平野北部、田園風景が美しく四季が身近に感じられる地域である。福岡都市圏の通勤圏にあり、住みやすさもあってか人口は2000年の28,882人から2020年は29,737人と微増。一方、高齢化率は1980年の12.6%から2020年には32.3%と40年で約2.5倍に増加しており、高齢化社会が確実に進展している。

1967年、特別養護老人ホーム朝老園はこの地に開設された。その後隣接地に介護老人保健施設も併設し、筑前町の高齢者福祉の一翼を担っている。開設以来50年以上経過した施設の老朽化に加え、これからの社会に求められる地域包括ケアシステムの推進を踏まえ、現在の大規模集中型から将来的な地域分散型を目指して、本体施設からの一部移転新築として計画を行った。町の北西部に位置する本体施設から約7km、町の南東部に位置し、町内の主要幹線となる国道沿い「久光」の地に、この地で生活をされてきた高齢者のための30人の特別養護老人ホーム、および10人のショートステイの計4ユニットと、地域住民も利用できる地域交流スペースからなるサテライト施設の第一弾として「朝老園ひさみつ」が計画された。

選ばれる施設づくりを目指して

社会保障・人口問題研究所の推計では、筑前町の人口はこれから減少局面に入る。したがって当面は高齢化率の増加は続くものの、高齢者の総数は頭打ち傾向となることが予想されている。その段階での特別養護老人ホームは、入居の順番を待つ施設ではなく、入居者や家族から選択される施設となる。選ばれるためにはスタッフのケアの質に加え、日常的な生活の場にふさわしい場づくりが求められると考える。

近年の介護度の高い特別養護老人ホームの入居者は、ユニットの中で生活が完結しがちな傾向にある。一方これから人口の減少が想定される筑前町の地域社会において、人々の交流を促す仕組みや空間がこれからのまちづくりに求められている。そこでまちづくりにも寄与しうる開かれた高齢者施設づくりを行いたいと考えた。

開かれた場づくりの仕掛け

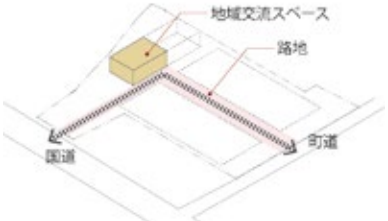
具体的な空間づくりにあたってユニットのリビング・ダイニング（LD）の入居者相互や面会家族、地域の方に「隣近所」のような関係性を与えたい。そこで、まちの新たなネットワークづくりと併せて、次のような建築的手法を用いてユニットを地域に開く場づくりを行った。

①通り抜け路地と交流スペース

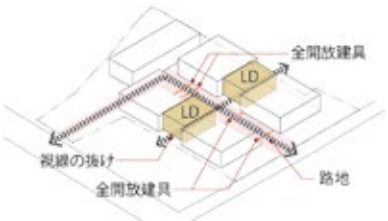
車の交通量の多い国道と住民が利用する町道の両方に接道する敷地形状を活かして、2つの道路を結び自由に通り抜けられるL字形状の路地を設けた。面会家族や地域の方も自由に通り抜けられるL字型路地の交点には地域交流スペースを配置し、そこでの活動の様子が2つの道路からも感じられる計画としている。

②2つのユニットの間を通る路地

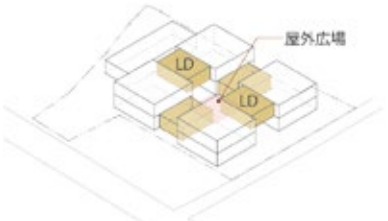
特別養護老人ホームは、夜間は2ユニットを1人のスタッフで見守るため、2ユニットが一体的に運用できる計画が求められる。そこで今回はユニット間を結ぶ2ヵ所の通路に全面開放可能な折戸を設けた。夜間は折戸を



①通り抜け路地と交流スペース

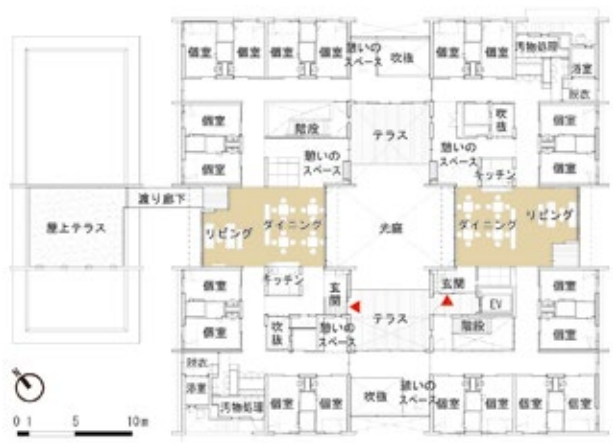


②2つのユニットの間を通る路地



③2階を90度回転し、ユニット相互を見渡す

1階平面図



2階平面図

閉めることで通路を屋内化し、2ユニットを回遊できる。一方昼間は建具を全開放することで、2ユニットの間に屋外の通り抜け路地を東西に通している。例えば日常的には犬を連れた面会家族の様子が向かい合う2つのLDから窺える。また、路地に面するLDも南北両側をガラス張りで背景を明るくして視線の抜けを確保し、面会家族からもLDの様子が感じられる計画としている。双方向の交流を促す場づくりは家族からも好評を得ている。

③2階を90度回転しユニット相互を見渡す

2階建ての特別養護老人ホームでは、通常1階と2階を同じ平面とすることが一般的である。今回はユニット相互の関係性をより深いものとするため、2階平面を1階と90度回転する空間構成としている。そのことで通り抜け路地中央の約10m×10mの屋外広場を中心に、立体的に東西南北どのLDからも他の3つのLDの様子が窺える計画としている。これによって家族や地域の方が通り抜けられる路地を中心に4つのユニットが取り囲み「隣近所」のような関係となっている。

生活の場としての配慮

空間構成の骨格づくりに加えて、これまでの設計経験も踏まえ「生活の場」となる空間づくりにも配慮した。

路地から各ユニットへの家族などの来訪者に対し、施設的な共通玄関は設けず、各ユニットの玄関に直接アクセスできる空間構成とすることで、地域の日常生活の延長にユニットの生活の場があると感じられるようにしている。またLD以外にもユニット内に大小の憩いのスペースや畳の小上がりなどを散りばめ、自分の好きな居場所が選べるようにしている。浴室や汚物処理室等の水廻りを集約するとともに、発生した汚物は職員専用の屋外階段を設けることで、ユニット内の生活の場を通ることなく直接屋外へ搬出できる計画としている。個室は隣接する個室とトイレや洗面を集約した計画により、四角い整形平面の使いやすい個室としている。

入居者や家族、地域住民の交流の場となる路地

路地越しに隣のユニットも見渡せるダイニング

祝祭性をもつ交流空間

この空間構成の意味を把握された法人では、季節折々のイベントを4つのLDに囲まれた屋外広場を舞台に開催されている。イベント時は地域交流スペースが踊りや合奏などの出演者の控室となる。日常的な路地がその日だけは立体的に4方向が客席となり、観客の誰もが演者と他の観客の様子を一望できるお祭りの場(祝祭的空間)に変貌する。日常生活の場がその日だけ祭りの場に変わるという、古くからの空間利用を現代に継承することで「地域に開かれた生活の場づくり」の運用に深みが出てきたと感じている。

全てのユニットが観客席となり、その日だけは祝祭空間となる路地

障害者施設

ごく普通の生活を営むこと

―福祉型障害児入所施設「富山県立黒部学園」―

創建築事務所
徳田義弘

富山県立黒部学園

改築前の黒部学園は、富山県東部の知的障害者入所施設として、18歳以上の過齢児も入所できましたが、児童と過齢児が同一の施設で生活していることは適切とは言い難く、改築後の学園は、18歳未満の知的障害児を中心とした施設となりました。

学園は、「家庭機能＋集団生活の場」を提供する施設であることから、住みよい住宅環境と交流の場を併せ持っています。特殊な施設設備や材料を使用せず、容易に修繕可能な整備とすることと、将来の社会生活へのスムーズな移行を促す観点での施設整備としました。

改築後の黒部学園は、子どもたちが集い暮らす「家」と、みんなで子どもたちを支援する「地域支援」の2つの機能で構成されています。「家」は積み木のような楽しさ、「地域支援」は開放性と純粋さを表現し、白い大きな「壁」を介して存在します。その「壁」は黒部学園のシンボルであり、中庭は子どもたちの集いの場となっています。

ユニットケア

ユニットケアの原点は、「サポートが必要な状態になっても、ごく普通の生活を営むこと」にあります。「ごく普通の生活」とは、1人1人の個性が生き、それぞれの生活リズムに沿って営まれる生活であり、かつ、社会の中に自分が位置づけられ、他の人との人間関係の中で営まれる生活です。

子どもたちは、原則として平日の日中は学校等に通うため、それ以外は家庭生活の場で過ごすこととなりますが、「社会へ戻るための過程」として日常生活での「食事」「排泄」「入浴」の訓練により、個人が介助なしで実現していくことが「社会へ戻るため」の具体的な目標となります。

ユニットに所属する児童をどのような基準でグルーピングするかは、年齢差・男女差・障害の程度などが想定できますが、これは集団をどうイメージするかによって違ってきます。また部屋の大きさや設えが単一で良いか、あるいは、グループの特性に応じて変えるかが問題です。日常の生活が全てユニットの中で賄えることは、ユニットケアという観点からは望ましいですが、多数の中で生活していく力を身につけていくためにも集団生活という体験は必要です。

黒部学園の居住棟

居住棟は、園児が日常の生活ができる住まいです。各ユニットには、居室、リビング（食堂）、浴室、トイレ等を配置しています。居住棟の特徴であるパブリックとして位置づける多目的ホールは、学園の大きな特徴となる空間で、屋内における大きなプレイルーム・イベントホールであり、晴れた日は中庭との一体利用も可能なスペースです。冬期間でも天井が高く自然光が差し込む明るい空間で、子どもたちが日中、思いっきり体を動かすことのできる場所です。

多目的ホールからユニット内のプライベートな居室をつなぐ装置として、ユニットリビング、プレイルーム、リビング等のセミパブリックな空間を連続させ、それぞ

居住棟外観　フラット屋根とハイサイドライトを散りばめたリズミカルなスカイライン

大きな中庭でひなたぼっこ

ユニットリビングで体験学習

ユニット中庭で水遊び

れのユニットは、回遊性ある動線を確保しています。

各ユニットには中庭を設け、水辺空間（地下水が豊富）を楽しく演出し、「遊びの場」としています。

①個人専用の場「個室」

個室は、第一に最終的なタイムアウトの場として1人になれることが重要であり、年齢に応じたプライバシーが求められます。

第二に自分らしさをつくれる場として身の回りの荷物を置き、絵やポスターを貼ったり、花を置いたりできるような設えをします。廊下に面した入り口回りにも何らかの自己表現ができる工夫を行い、「自分の部屋」をつくりやすくし、4.5畳の個室で快適に生活できています。

第三に障害の程度に応じた設えをします。特定刺激の除去（音・光・匂い等）・安全性への配慮（転倒時に安全な壁・床の仕上げ）・管理上の配慮（汚れにくい床仕上げ・壊れにくい仕上げや設備・施錠等）なども考慮します。

施設的には上記3点を考慮して個に応じた環境がつくりやすく、使いながら容易に設えを変えられる工夫をします。

②リビング

リビングは必ずしも利用者同士がコミュニケーションできるわけではないですが、同じユニットで生活する家族（兄弟・友達）が時間と場所を共有し社会性を築く場とし、個室との対比で構造化される最初の場所です。

③「食事」「排泄」「入浴」

「食事」「排泄」「入浴」はスタッフに大きな負担をかける行為ですが、利用者にとっては豊かな生活に直接結びつきます。ユニットケアの目指す「ごく普通の生活」に欠くことできない行為であり、重要なコミュニケーションの機会でもあります。このため、「食事」「排泄」「入浴」はユニット内で完結することが理想であり、施設的にはスタッフの負担をいかに少なくするかが課題です。

黒部学園のユニットの考え方

ユニットは、園児の特性に合わせた4棟の配置です。

①自活訓練棟……2ユニット9部屋

男女で各々のユニットを構成し、2つのユニットを繋ぐリビングを配置し、中庭を通して向かい合う配置で回遊できる廊下を持っています。地域や家庭に戻れるよう日常的な訓練を行えるようにしており、「家庭」という体験が少ないので、このユニットにおいて「家族の団欒」のような環境づくりを行っています。

②年少・年長棟……2ユニット24人（1人部屋12室、2人部屋6室）

年齢や男女でユニットを構成しています。地域や家庭に戻る、あるいは自活訓練棟にステップアップすることを目的とした訓練やサポートを行っています。

③行動障害棟……3ユニット18部屋

行動障害を有する児童が、安定できる環境で生活を行いながら一般ユニットに移行できるよう訓練・サポートを行います。エネルギーを外に向けてしまうグループ、静かな環境を好むグループ、低学年のグループという、数名ずつによる3ユニットに分かれ、各々が安心して生活ができるよう配慮しています。

④強度行動障害棟

強度の行動障害を有する児童が、心身を安定させることを主としたユニットです。人とのコミュニケーションをとることが困難なため、日中は登校せず、日常訓練室で過ごします。起床から就寝までユニット内で過ごすことが多くなるため、日常生活において安全な外部空間で自然に触れながら、活発に活動できます。

黒部学園は平成20年に竣工し、公立の施設として「個室化」を先駆けて取り入れ、自立に向けた支援および地域生活につながる支援の大きな拠点となっています。

これからは、障害児入所施設の小規模ケア化、地域分散化を進め、地域でサポートし合いながらきめ細やかに皆で子どもたちを育てることや、障害のある子どもと障害のない子どもが、分け隔てなく可能な限り共に学ぶことができる「インクルーシブな学校」づくりも大切です。

テレワーク環境での生産性アップの仕事術

―Slackとzoomを使ったチーム・コミュニケーション―

個人協力会員
スタジオネオ
伊波サチヨ

新型コロナウイルスにより半ば強制的にはじめたテレワーク。ウェブサイト制作やグラフィックデザインを行うスタジオネオでは、2年が経過した今もスタッフ8名の在宅勤務を継続し、新規受注から打ち合わせ、納品に至るまでのクライアントのやり取りもオンライン化により業務の効率化を果たし、昨年は増収増益を実現しました。それ以前の「～すべき」という固定概念を壊してみると、新たな可能性を見つけることができ、社員も会社もクライアントも幸せになる、そんな仕事のスタイルができあがりました。その当社のテレワークのスタイルを連載形式でご紹介させていただきます。

当初の課題

2020年3月、はじめての緊急事態宣言が発令され全社員の一斉在宅勤務を決断しました。それ以前も一部の社員には、遠隔地への転居を理由にテレワークを認めることはあり、社員の自宅から会社のFile ServerにVPN接続し同じファイルを更新したり、Skypeを使ったビデオ通話も行っていたため、自宅で仕事をさせること自体には抵抗はありませんでした。しかし全社テレワークとなると話は違います。「できるはずがない」事項が私の頭にいくつもよぎりました。

その1つは新人への指導でした。4月には新卒の入社が決まっていましたが、何もできない新人が自宅で仕事などできるものなのか、そもそも教育自体が難しいのでは、雇用を維持できるかさえ不安がありました。

またそれ以上の懸念点は、社員の勤怠管理と業務状況の把握です。同じ空間にいれば今何の仕事をしているか、忙しそうなのか逆にやることがない状況なのかを自然と把握することができます。これまではその状況から判断、指示を出しチームでの共同作業を進めてきました。しかし目の届かないテレワークでは勤務状況の管理はおろか、プロジェクトディレクションさえも難しいのではないかと、従来の仕事のスタイルからは想像もつかない難題が私の目の前に立ちはだかりました。

しかし「まずはやってみるしかない」と知り得る限りのネットツールを駆使し、会社のiMacを社員の家に宅配便で送り、テレワークがスタートしました。

1日の始まりはzoomミーティング

当社では毎朝、ビデオ会議アプリzoomによる社内ミーティングを30分～1時間行います。常に10件近くの制作案件が同時進行しているため、各担当者からの前日の進捗報告と、今日の作業分担を画面共有しながら話し合います。基本的にはビデオオンでの参加としているため、社員の表情からその日の調子を感じ取ることができたり、私から提案を投げかけた時にうんうんと頷いているか、あまり賛同を得られてなさそうだな、といったことが反応から汲み取ることもできます。また顔を出すことで身だしなみを整えたりと、在宅でありながらも仕事モードに切り替えるきっかけにもなります。対面のコミュニケーションには及びませんが、毎日全員で顔を合わせるこの時間は、1日分の凝縮された大切な時間です。

ピンポン玉のように飛び交うSlackメッセージ

勤務時間内の会話はSlackを使っています。質問や報告、指示はもちろん、ファイル共有しながらの共同作業の中では「今、このファイル開いてますか？」「はい。今閉じました」「ありがとう。開きます」などといった秒単位での会話がSlackで行われています。各プロジェクト担当者からの相談や質問は、四方から飛んでくるピンポン玉のようで、返すのに息つく暇もないといった状況です。こんな日々を過ごしていると、みな口で話すよりもキーボードを打つ方が早くなってしまいました。

チャットアプリといえばLINEやMessengerもありま

朝のミーティング風景

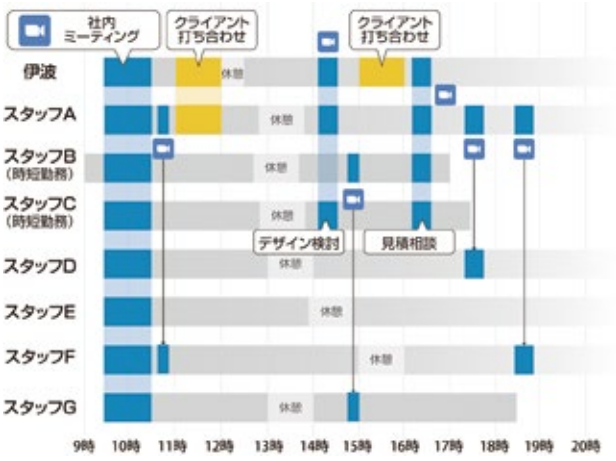
すが、社内で動いている複数のプロジェクトを各チャンネルに分けて登録し整理して展開できるところがSlackならではの便利なところです。さらに同じプロジェクトの中でも各人からの質問や報告など、次々に違ったトピックスが投稿されます。そこで私たちは1つのトピックスに対しては、スレッドで返事をするルールとしました。1つのチャンネルでどんな話題があったか、その回答や指示などはどういったものだったかをスレッドを開けば見ることができるようになっています。一方で自分と関係のないスレッドは読まずに済むため、無駄な時間を費やすことはありません。また指示したい画面の部分キャプチャをコピペで瞬時にチャット内に貼り付けできたり、重要な投稿はブックマークやピン留めして探しやすくしたりと時短を実現できるツールとなっています。

zoomは電話代わり

Slackによる整理されたテキストによる報告や指示は、受け取る側も理解しやすく作業効率も上がりますが、複雑な内容であったり直接相談した方が早いと判断した場合はすぐに「今、zoomいいですか？」と呼び出されます。zoomへの接続もすぐにルームに入れるようアドレスは定期的なミーティングとして発行しパスワードなしにしているため、保存した履歴から即座にそのアドレスに入って電話のような気軽さで話ができます。

そして何よりも効果的なのがzoomの画面共有です。対面でスタッフのPCを少し距離をおいて見るよりも、自分のPC画面で展開されることが非常に見やすく、デザインの方向性を探る際にもスタッフと私の脳がつながっているかのように、私の言葉を通じて同じ思考過程で構築していくことができる感覚があります。

クライアントとの打ち合わせもほぼオンラインとなり、移動時間を気にすることなく以前に増して気軽に頻繁に打ち合わせの時間が持てるようになりました。



テレワークにおける1日の業務の流れ

当社のSlack画面

課題解決のカギはツールの「使い方」

心配していた新人の教育も、zoomの画面共有で先輩が自分の画面を見せながら説明したり、新人の画面を見て問題箇所を指摘するなどで、指導面でも大きな効果がありました。その1年後の成長ぶりは2〜3年分に相当するほどの驚きのものでした。

チームでの共同制作も、Slackのテキストによる指示の明確化、情報の蓄積と共有化が実現し、以前よりも効率を高める結果となりました。秒単位のチャットは、離れていても同じ時間で仕事をしている感覚を与えてくれます。勤怠管理もこのようなペースでSlackとzoomが回っているものですから、休憩に入る時はもちろん少し席を外す時もtalkチャンネルで報告、手持ちの作業を終えたら「手が空きましたが、何かできることがありますか？」と投げかけてきます。業務を終えるときも「お先に失礼します」と投稿しその時刻も見え、勤怠アプリによる勤務時間の把握も出社時と変わらず行っています。

テレワークがもたらした大きなメリット

これらのデジタルツールの活用により生産性が向上し、新人だけでなく社員全員の成長がありました。そしてテレワークのメリットはやはり通勤からの解放でした。月10万円を超えていた交通費の負担はなくなり、保育園に預けながら働くベテランのデザイナーは、往復3時間の通勤時間を仕事にあてることができるようになりました。子どもが熱を出しても、保育園が休園になっても、有休の残りを心配することなく仕事をすることができます。ペットと過ごす時間が増え喜ぶ声もありました。高齢の両親の住む地方への移住を決めたスタッフもいます。これまで当たり前だと思っていたことを、デジタルツールに置き換えてみたら、新しい価値が見えてきました。それは会社にとって生産性が上がり、社員にとっても働きやすい、それまでの問題の解決策となるものでした。

秋山利輝（としてる）氏に聞く

丁稚制度で一流の家具職人を育てる

今回は、横浜市都筑区で注文家具をつくる秋山木工の秋山利輝さんにお話をうかがいました。迎賓館や宮内庁、国会議事堂などの家具製作を任される職人であると同時に、独自の教育制度「丁稚制度」を導入して、一流の家具職人を目指す若者を育てることにも注力されています。秋山さんご自身のこと、また職人を育てるうえで大切にされていることなどをお話しいただきました。

――さっそく秋山さんにお話をうかがっていきます。まず最初に、職人とはどのような商売だと思いますか。

職人は人を喜ばせるもの、人の心を動かせるものです。それはものづくりだけに限りません。メジャーリーガーの大谷翔平選手は、人を一瞬で感動させることができる一流の職人です。私は自分自身が職人として働きながら、家具職人を目指す若者を一流の職人に育てることに力を入れています。技術だけではなく、人柄も一流の職人を育てるために長年師弟制度を続けています。

――秋山さんが家具職人の道に進まれたきっかけから教えていただけますでしょうか。

私は奈良県の明日香村で生まれ育ちました。勉強も運動も苦手でいつも授業中立たされているような子でしたが、小さい頃から手先の器用さは飛び抜けていました。周囲の勧めもあり、中学卒業後に大阪の木工所で働けることになりました。珍しくまだ丁稚（でっち）制度が残っている会社で、16歳から丁稚として住み込みで修業を始めました。親方は厳しかったですが、そこで働かせてもらえることが奇跡だと思っていましたし、寝食を共にするなかで技術を習得し、人としても成長させてもらいました。

秋山木工を興したのは27歳の時です。それまでに職人として4社で働き、最後に勤めた大手百貨店の製作所では宮内庁に納める家具を作らせていただく機会もありました。16歳で丁稚から始めて10年で、日本の中で一流の家具職人として認めてもらえるまでになることができました。そんな時に会社を辞めることになり、私に付いてきてくれる職人もいたので秋山木工を立ち上げました。昨年7月にちょうど50周年を迎え、今は主に大手百貨店や国会議事堂、宮内庁、高級ホテルなどの家具を製作しています。

――なぜ勤めていた会社を辞めることになったのですか。

私は周りの人が夜9時まで残業しているなか、同じ仕事を4時には終えて、次の日の段取りをして5時には帰っていました。帰宅後は桑沢デザイン研究所でデザインを学んだり、アルバイトをして稼いだりしていました。とにかく仕事が早かったのです。そのうえ上司は私の仕事がいちばんきれいだと評価してくれていました。そのように抜きん出ていたので周りから疎まれてしまい、会社を辞めることにしました。

私は1日は72時間だと思っています。1日は24時間と信じてしまったらエジソンのような人にはなれません。1日48時間では一流プレイヤーにはなれますが、スーパースターにはなれない。普通の人の3倍やらなくては日本一、ましてや世界で活躍する人にはなれません。

若い職人が技術を競う「技能五輪全国大会」というものがあります。職人の技能を上げるために、当社からも家具部門に毎年数人出場し、メダルの常連になっています。金メダルを取る人はやはりスピードと正確さが違います。設計でも「丁寧にやっています」というのはただ下手なだけということではないでしょうか。丁寧というのは段取りが悪い人のこと、時間がかかる人は頭が回転していないということです。日本では何でも丁寧にやればいいと勘違いしている人が多いですが、うちでは丁寧はまったく評価されません。

――職人を育てる丁稚制度について教えてください。

秋山木工は創業50年ですが、45年ほど前から職人を育てるための研修制度を設け、家具職人見習いの若者を丁稚と呼び、寮で集団生活をしてもらっています。1年間の丁稚見習いも含め、丁稚の5年間で基本的な訓練と段取り、また職人としての心得を学びます。丁稚の修業期間を終え、職人として認められた人は法被（はっぴ）をもらい、職人として3年間働きます。秋山木工にいられるのは丁稚5年、職人3年の計8年間です。8年経ったら辞める決まりになっています。

丁稚たちとの食事

丁稚の間は男も女も頭を丸坊主にして、恋愛禁止、携帯禁止、親とのやり取りには手紙を書かせます。そのく

らいのことをしないと一流プレイヤーにはなれません。丁稚はお盆と正月しか実家に帰らず、日曜は休みですが自分の作品をつくったり練習をしたりします。

――現代の若者にとっては大変厳しい環境に思えますが、そこまでなさるのはなぜでしょう。

木工の技術を磨くだけではなく、人柄も磨かなくては人の心を動かす一流の職人になれません。集団生活を通して職人としての基礎をつくることに集中することが重要なのです。食事の仕方や手紙の書き方、話し方など、この制度から技術と心を磨き、立派な家具職人になってもらいたい。日本の技術や素晴らしさを伝えることで、日本を少しでも良くしたいと考えています。

また、秋山木工では職人としての心構えを説いた「職人心得30箇条」というものを大事にしており、これを毎日朝礼で唱和します。8年間で1万回くらいは声に出して言うことになるでしょう。それだけ言えばこの心得が潜在意識の中に入っていき、自動的に職人としての振るまいが身に付くのです。

――「職人心得30箇条」はどのようなものなのですか。

「挨拶のできた人から現場に行かせてもらえます」「連絡・報告・相談のできる人から現場に行かせてもらえます」というように、どういう人が仕事をさせてもらえるかを説いています。

心得10は「おせっかいな人から現場に行かせてもらえます」、心得11は「しつこい人から現場に行かせてもらえます」となっています。しつこい人は普通は嫌われますが、1回言い出したことは絶対に最後までやり抜くということ。私はおせっかい、しつこい、図々しい、この3つは人には負けません。今、日本がいちばんダメなのは「人に嫌われるから言わない」という姿勢です。1回言っただけで身につけられる人はいませんから、何度でも教えてあげればいいだけのことなのに、嫌われないようにと自分を大事にすることを優先にして、その子のために動くことができない人が多い。それでは日本はどんどん後進国になってしまいます。

――8年間育てた職人を独立させると決めているのはなぜでしょう。

私は秋山木工を私的な会社ではなく公共の会社として経営しています。すべて日本のために、誰かを幸せにするために行っていることですから、職人を私物化するようなことはしません。それから、私の天命は私を超える職人を10人出すことなのです。最初は簡単なことだと思っていましたが、私だけを見ていたら私を超えることはできません。ですから8年で辞めさせて、他の世界を見てくるようにさせ、世の中で役に立つ職人になってもらいたいと思っています。

工場での様子

――独立後は皆さんどのような場所で働いているのでしょうか。

独立している子もいますし、家具をつくる他の工房に勤めたり、親の家具屋を継いでいる子もいます。秋山木工の職人は技術も人間性も高いので、どこに行っても工場長くらいになることができますし、喜んで採用していただけます。それから、辞めた後もネットワークができていますから、仕事をお願いすることもありますし、数年経ってから秋山木工に戻って働く子もいます。

――インタビュー中、修業中の若い人たちが、自己紹介や感謝していることを披露してくれました。

当社では「思いやりの心」「人に気遣いができる心」「感謝できる心」を大事にしており、集団生活を通してそういったことを身につけてもらいたいと思っています。今のようにお客様の前で自己紹介してもらうこともしょっちゅうです。1分間の自己紹介をきちんとできるようにするのが最初の訓練です。今の自分を知り、それを相手に伝えることが大事なのです。そして親への感謝の気持ちがないといけません。

最近は技能五輪で1位、2位を独占し、全国から打倒秋山木工と言われるまでになりました。創業から50年で技量も一流だと認めていただいています。これからも日本人の技術を若者に伝え、人の心を動かすことのできる職人を育てていきたいです。

――貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2022年3月10日　秋山木工にて
聞き手：望月厚司・関本竜太・中澤克秀（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

秋山利輝（あきやま　としてる）

家具職人・秋山木工グループ代表
1943年奈良県生まれ。16歳で家具職人の道に入り、1971年に有限会社秋山木工を設立。秋山木工の特注家具は、高級ホテル、一流ブランド店などで使われている。丁稚制度を用いて、人間性を重視する独自の人材育成は、国内だけでなく海外からも注目を集める。著書『丁稚のすすめ』（幻冬舎）、『一流を育てる』（現代書林）

そとに暮らす

—ベトナムにみる屋外空間の魅力—

佐貫大輔

ベトナムに移り住んで早12年になる。2020年から続く新型コロナウイルスはそれまで安定していると思っていたベトナムでの生活を一変させた。当初ベトナムは厳しい渡航規制により国内では大きな制限は行われなかったが、2021年には感染者数が爆発。南部のホーチミン市で市民900万人が外出を禁じられ、軍隊も出動する中、1ヵ月ほど買い出しすらも厳しく規制される日々が続いた。普段は活気のあるホーチミンもまるで別の街であるかのように閑散としており、失って初めてベトナムの街にとって、いかに路上での人々の往来や屋外の自由なアクティビティが重要であるのかを改めて気付かされた。

2022年4月現在、ベトナムのコロナ禍は落ち着きを見せ、街は賑わいを取り戻しているが、私自身はベトナムのエネルギッシュな街並み、特に屋外を利用した暮らしに今まで以上に魅力を感じるようになった。今回はそうした生き生きとしたベトナムの屋外空間の使われ方とともに、自身の住宅設計についても触れてみたいと思う。

ホーチミンのソーシャルハウジング

ホーチミンの都市を歩くと、大通りには面していない路地の内側に建つ団地のような古い建物群に出会うことがある。これらはベトナム語でkhu ở tập thể（ドミトリーの意）と呼ばれ、植民地時代の投資家や、ベトナム政府などによって19世紀末から1980年代まで建てられた社会住宅である。現在も低所得者向けの住宅として点在しており、すでに老朽化ならびに再開発計画によって多くが取り壊されることが決まっているものの、住民たちの反対によって今のところまだその姿を見ることができる。

ここで興味深いのはその共用部分だ。多くは外廊下型となっており、共用部である屋外の廊下部分は住民たちの手により大きくカスタマイズされ、半ば私有化されている。例えば廊下にソファーが置かれ外のリビングになっていたり、風通しの良い階段部分は老人のアトリエになっていたりする。いくつかのアパートが連続しながらブリッジでつながれており、さながら立体的な街のようになっていて、さまざまな素材で仕上げられた入り口や住民たちの洗濯物、家具や植栽などにより、路地から見ると異様かつ魅力的な外観を示している（図1）。

プライバシーが求められる現在のベトナムでは、こうした形式のソーシャルハウジングは新規に建てられることはほぼない。しかしながら屋外と一体となったその豊かな生活は、ベトナムならではの住まいの可能性を示してくれているように思う。

SQUATTING

ソーシャルハウジングの例に見るように、ベトナムと日本ではパブリックスペースに対しての感覚が全く異なる。日本では道路や公園などは行政あるいは権利者によって管理されたスペースであるのに対し、ベトナムでは家の前の道路は自分の持ち物であり、法律ギリギ

図1-1：ソーシャルハウジング「Nguyen Thien Thuat Apartment」外観

図1-2：ソーシャルハウジング「Nguyen Thien Thuat Apartment」共用廊下

図2：路上パブリックビューイング

リ（時にはイリーガルに）バルコニーを伸ばし、オーニングによって建物を前面に拡張し、ベンチやテーブルや植栽などによって自分たちの好きなようにカスタマイズする。当然そこには近隣や警察とのさまざまな駆け引きがあるのだが、この言わばSquatting（占拠）によって貪欲に「陣地」を獲得していくスタイルは、いろいろと問題となることも多い一方、ベトナムのアクティブな屋外空間と、生き生きした街並みを構成している要素になっている。店舗前の歩道はもちろん、HEM（路地）空間や、建物の屋上、アパートの共用廊下など、ありとあらゆる所が私的領域として拡張され、居場所化される。例えば道路の高架下に低いテーブルと椅子を並べて酒場に変えたり、サッカーベトナム代表のゲームの際には、突然路上にプロジェクターと椅子を並べて作られた即席のパブリックビューイングがたくさん現れたりする。ベトナムの人々にとって見慣れたこの風景も、我々にとってはとても新鮮で魅力的な使われ方であるように感じる（図2）。

高密度な都市に空白を設計する

ベトナムの住宅は、チューブハウス、アパートメント、ヴィラ、ルーラルハウスと大きく4つの形式に分けられる。中でもチューブハウスはさまざまな所得帯の人々が住んでおり、全住宅のおよそ8割にのぼる。戸界壁を共有しない3〜5階建ての細長い建物であるが、ホーチミン市内の大通りの街区の内側にはこの住宅がびっしりと隙間なく建てられている。街区内は細い路地（HEM）が毛細血管のように巡っており、このHEMと一部の寺院などを除いて公園などのパブリックスペースなどが入る隙間は微塵もない。人も建物も樹木もバイクも隙間があればどこにでも入り込むのだ。

一方そのようなタイトな環境でありながらも、できるだけ樹木や屋外を感じられる住宅を望むクライアントは多い。空調で制御された住宅ではなく、屋外に開いて風や緑を感じる暮らしを身体的に求めている。私たちがベトナムの市街地で住宅を設計する場合、常に気をつけているのは「どこに空白を設計するか」である。

普通に建物を配置してしまうと、風通しが悪く光が入らないジメジメした劣悪な環境になってしまう。そこで屋外空間となる空白部分をあらかじめ設定し、それらが室内と連続することで開放的なスペースとなるように設計する。高密度な都市居住でありながら、緑や自然の光や風を感じ取れる屋外とともにある住宅はベトナム人が望む豊かさにつながるのではないかと考えている（図3）。

図3：「NGA House」空撮。チューブハウスによる超高密度な街区内部の住宅

そとを内包する住宅への試み

先述したように屋外を積極的に利用する感覚や住まいは、ベトナムの人々の暮らしを特徴付ける重要な要素であるように思う。私たちはこれまで関わった多くの住宅の設計において、さまざまな形で屋外を取り込んだ熱帯らしい空間の提案を試みている。ここでは現在工事中の2つの住宅プロジェクトを紹介したい。

「Floating House in Thu Duc」はホーチミン郊外に建つヴィラ形式の住宅である。川沿いの敷地で雨季には敷地全体が水没することもあるため、建物全体を地面から浮かせた3つのスラブによる構成とした。150×300mmの柱梁により構成されたフレームの間は開口部となっており、開け放つことでほとんどが屋外となる。それぞれの床スラブは形が異なることでさまざまな「そとの居場所」が作られ、外階段によって屋上までつながり、周囲の美しい木々や川の風景を望むことができる（図4）。

「Vung Tau House」は南部の都市Vung Tauに建つチューブハウスである。建物正面が西側に向いているため、強烈な南国の西日を遮りつつ、光と風を取り込む必要があった。私たちは建物の前面半分を大きな樹木のある屋外の庭として定義し、ファサードと屋根部分にハの字型のスチールプレートによるシェードを配置した。このシェードにより庭には時間とともに変化する木漏れ日のような光が差し込み、それぞれの居室とは開口部を開け放つことで一体の空間となる（図5）。

図4:「Floating House in Thu Duc」現場写真

図5：「Vung Tau House」現場写真

長くこの国に住んでいるが、年々ものすごい速さで街並みやライフスタイルが更新されていくのを実感している。その中でも残り続けるであろうベトナムの人々の持つ屋外空間に対する感覚は、我々建築家にとって大いに学ぶところがあり、これからのベトナムや途上国の建築を考える上で重要な視点であると思う。今後もベトナムでの仕事を通してさまざまなものを観察する中で、東南アジアの建築に何が可能かを考えていきたい。

佐貫大輔（さぬき だいすけ）

1975年生まれ。2004年東京理科大学博士課程単位取得退学後、2008年まで同大学小嶋研究室助教。2009年より渡越し、2011年までVo Trong Nghia Architectsパートナー。設計事務所S+Naを経て、現在ホーチミンにてsda. - Sanuki Daisuke architects代表。ベトナムを中心に建築設計、アーバンデザインなど幅広く活動している。主な作品に「Stacking Green」「ANH House」「Apartment in Binh Thanh」等。

第33回 JIA神奈川建築WEEK　かながわ建築祭2022

未来へ残すもの、変えてゆくもの

神奈川地域会
八板晋太郎

開催日：2022年3月4日（金）～3月6日（日）

昨年より1ヵ月も遅い春一番が吹いた3月初旬の週末、JIA神奈川が主催するイベント「かながわ建築祭2022」が開催された。昨年はコロナ禍のため非公開での卒業設計コンクールのみとなったが、今年は全ての企画を実行することができた。この数年間、JIA神奈川では「『サステナビリティ』を考える」をテーマにさまざまな活動を展開してきた中で、「未来へ残すもの、変えてゆくもの」と題したこのイベントはその総括ともいえる充実した内容となった。以下、開催順に各企画のレポートをお届けしたい。

まち歩き「旧根岸競馬場の保存に向けて」
―山下居留地、山手の丘、根岸　J.H.モーガンの建築を巡る―

今回のまち歩きは、保存活用に向けた動向が注目される旧根岸競馬場を目的地とした。根岸競馬場は江戸末期に日本初の洋式競馬場として開設され、唯一現存する一等馬見所（ばけんじょ）は横浜で設計活動をした建築家J.H.モーガンの設計による。コースはまず山手の丘の突端にあるアメリカ山公園に登り、江戸初期の新田開発から始まり山下居留地を起源に持つ市街地を見渡すところから出発し、尾根道伝いに同じくモーガンの作となる山手111番館、山手聖公会、ベーリックホール、その他いくつかの近代建築や遺構を見ながら旧根岸競馬場に辿りついた。

鉄骨の大屋根はすでに解体されているが、3本のエレベーター塔が象徴的に聳え立つファサードは往時の趣を感じさせ、現在も地域のランドマークとなっている。米軍接収後に市に返還されたものの改修は手つかずの状態で、外壁は蔦で覆われて劣化が進み、今後は保存に向けてドローンによる3D測量などが求められていることが解説された。その後、ディペンデントハウス（占領軍住宅。市へ返還後、今年末までに解体予定で建築学会から保存要望書が出されている）を経て、隣接する丘にある地蔵王廟（中華系の共同墓地）から旧根岸競馬場を遠望するところで総距離約6km、高低差30mを3時間で巡る全行程を終えた。横浜の都市の成り立ちは開港以来の近代発展史そのものともいえ、テーマを持って能動的に歩くことでまちの歴史を空間的に追体験することができた。

シンポジウム「設計者選定制度のこれから」

昨秋のJIA神奈川のイベント「建築フォーラム2021」での議論を受け、今回のシンポジウムでは「設計者選定制度」を取り上げた。「公共建築の設計者をどのように選ぶべきか」という大きなテーマに対し、地元行政と近い地域会の特性を活かし横浜市建築局との共催とし、発注者とそれを支援する専門家、応募する建築家のそれぞれの立場から対面で議論する貴重な機会となった。

パネリストは、肥田雄三氏（横浜市建築局 公共建築部長）、小野田泰明氏（東北大学大学院 教授）、藤沼傑氏（ウィスト建築設計）、田邉雄之氏（田邉雄之建築設計事務所）で、司会・モデレーターは小泉雅生氏（JIA神奈川 代表）が務め、前半は各パネリストによるプレゼンテーション、後半はその内容を受けたディスカッションが行われた。

まず小野田氏から、これまで設計の前段階である「プレデザイン」を担う専門家として数々のコンペ・プロポーザルに関わり、各地の行政に対して支援を行ってこられた立場として、日本の設計者選定の歴史を5期に区分し、請負・入札からコンペ、プロポーザル、2段階デザインビルドなど方式の多様化に至る現在までの変遷をたどるレクチャーがあり、建築学会でのガイドライン策定の経緯や、法律上コンペ方式が基本にあり2次審査に若手を入れることも明示されているフランスの事例など

まち歩き　一等馬見所での解説の様子

シンポジウム　ディスカッションの様子（KGU関内メディアセンター）

シンポジウム　会場との質疑応答

卒業設計コンクール　公開審査の様子（横浜市民ギャラリー）

卒業設計コンクール　会場展示風景

が紹介され、これからの仕組みづくりが課題であることが問題提起された。

田邉氏は応募者の視点として、情報収集や登録の煩雑さ、事務所所在地による制限、前職や海外での実績が評価されないことなどが若手参加の障壁となっていること、採点基準が不明瞭で、提案書の文字や図版の量は増加傾向にある一方で無報酬の場合が多いことなどを課題として挙げ、やはりフランスの事例として、2次審査参加者には基本設計料の8割が支払われ、プログラミストという運営側を支援する職能があることも紹介された。そして募集情報や登録の一元化、プログラム作成の専門家の地位確立、1次審査の簡素化と2次審査の有報酬化、JIAによる組織的サポートなどの改善策が示された。

藤沼氏はまず自身の経験から、中国・韓国では入札は法的に禁止され、一定額以上の業務は全てコンペとなるため日本のプロポーザルと違い膨大な成果物が求められること、次に、以前在籍されていた組織設計事務所ではプロポーザルに特化した部門が情報の収集分析や現地調査を行うことで勝率を高めていることが紹介され、結果として全国の公共施設の多くを東京の一部の事務所が担う現状には疑問も示された。そして大井町駅前トイレのコンペでの成果から、JIAが公益団体として、若手から組織系のベテラン、ファシリテーターまで含めプロジェクトごとに発注者を支援する可能性を持つことが提言された。

肥田氏からは、横浜市ではプロポーザルを基本（全体の約4割）としながら、規模や内容により入札・随契も併用しており、これ以上プロポーザルを増やすのは業務量的に難しいこと。実績要件については対象期間や規模、用途などを段階的に緩和しており、文章のみの簡易な提案書により省力化しながら内容で選ぶことも行っていること。審査する立場からは、提案者の思考を見極めるために情報量は重要だが、それが過密なプレゼンテーションにつながり、当選案が公表されると許されていく悪循環があることが指摘された。そして令和4年度には市の公共建築100周年事業の一環で、若手設計者を対象としたコンペを開催することも発表された。

その後のディスカッションでは、国交省のマニュアルの見直しや第三者による設計レビューの重要性、事業費が上がるリスクからコンペは敬遠されがちだが、それを回避する手法であるデザインビルドにも一定のコストの中で設計品質をいかに保つかという別の課題があること。1次の敷居を低くし2次でコストも含め精査することで事業費のリスクは回避できるが、審査には専門家を入れないと現実的な案を選べないこと、提案書にはある程度の枚数は必要でそのためには報酬も求められるべきだがそれを受け入れられる自治体はまだ少ないことなど、大変実践的かつ本音の議論が活発に行われ、課題の共有と今後の持続的な制度のあり方に向けて対話ができた意義は非常に大きいと感じた。

公開審査「神奈川7大学1専門学校卒業設計コンクール」

例年は地下鉄馬車道駅のコンコースという街に開かれた会場で行われていたが、改修工事のため今年は横浜市民ギャラリーで開催された。市民ギャラリーという場所柄、一般の方や親子連れ、他の企画展示からたまたま立ち寄った方などさまざまな来場者が見られた。

学生にとってはコロナ禍2年目でその影響も懸念されたが、映像作品を主体とするもの、マイノリティを対象としたもの、視覚実験をまとめたものなど、全24作品のテーマ設定は多岐にわたり、各自の関心や興味を掘り下げた成果が各作品の多様性に表れているという審査員の方のコメントに共感を覚えた。審査は、審査委員長の福島加津也氏、審査員の中村竜治氏、髙橋一平氏、冨永美保氏により公開で行われ、提案内容、プレゼンテーション、模型など総合力でバランスの取れた横浜国立大学 藤本梨沙氏の「諦めない人生を支える、まちの大給食室」が金賞に決定した。その後の選考は、今年の作品の多様さを象徴するように審査員の票が割れ、混戦模様となったが、最終的には銀賞に東海大学 太田匠氏の「弔いの聚落」、銅賞に慶應義塾大学 圓谷武大氏の「円谷英二特撮倉庫」が選出され、観戦者としては大変エキサイティングな公開審査であった。会場には旧根岸競馬場などの神奈川近代建築の解説や会員による近作のパネル展示も行われた。

昨秋のイベントと同様、シンポジウムは対面とオンライン同時配信を併用した開催形式とし、卒業設計コンクールの公開審査も含め、JIA神奈川のYouTubeチャンネルで配信を行っているので、ぜひご覧いただきたい。

残したい世田谷の風景

世田谷地域会
青野達司

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

2015（平成27）年の保存問題東京大会において世田谷地域会は14の建物を紹介しましたが、そのうちすでに4件が無くなり、2件が無くなろうとしています。世田谷区では1999（平成11）年3月に風景づくり条例を制定し、その中で次の世代に伝えたい風景を区民が守り、育て作れるように地域風景資産を誕生させました。その特色は風景をただ守るだけではなく区民が風景を育てるという仕組みにあります。地域風景資産に選定されるには次の4つの条件を満たす必要があります。1. 風景としての資産の価値があること、2. 地域の共感、共有があること、3. 風景づくりにつながるアイデアがあること、4. コミュニティづくりにつながる可能性があること。これまでに3回の選定が行われ、合計で86の風景が選定されています。最初の選定から20年が過ぎ、高齢化等で活動人を取り巻く環境も変わりつつあります。

清明亭（せいめい）

東京都選定歴史的建造物　世田谷区第1回地域風景資産

設計：大江新太郎／1931（昭和6）年

都立深沢高校内にある清明亭は、製薬会社「わかもと」の創業者長尾欽弥夫妻の寝所だった。戦後建物の所有は長尾家の手を離れ、最終的に東京都のものに。清明亭という名前は、1963（昭和38）年に開校した深沢高校の校訓から名付けられたものである。設計は大江新太郎、請負は京都の木村工務店。

清明亭（深沢）

旧林愛作邸

設計：フランク・ロイド・ライト／1917（大正6）年

林愛作は帝国ホテル初の日本人支配人。フランク・ロイド・ライトとは、前職の時にニューヨークで日本の美術品取引を通じたつながりがあったのでは、と言われている。林は帝国ホテル新館（ライト館）計画にあたりライトを招聘。来日したライトは滞在中に林愛作邸を設計した。プレイリーハウス・スタイルの住宅で、日本国内に現存する4つのライト建築のひとつ。

旧林愛作邸（駒沢）

旧尾崎愕堂邸（がくどう）

憲政の父と言われた尾崎行雄（愕堂）が麻布笄町（こうがい）に建てた洋館を、1933（昭和8）年に現在地に移築したもの。区内に残る数少ない明治の遺構。2021年になり建物が売りに出されたが、現所有者が不動産業者から買い戻し、敷地内で曳家をして商業施設として再生することを検討中。しかし、木製下見板張りの外壁と木製建具を残した再生が法的に解決できず、再生するには行政との調整が必要で、文化財としての登録も視野に入れているがまだ先が見えない状況となっている。

旧尾崎愕堂邸（豪徳寺）

国分寺崖線（がいせん）

世田谷区西南部にあり、多摩川が10万年以上の歳月をかけて武蔵野台地を削り取ってできた段丘。周辺に残る樹林や湧水などの自然環境は、世田谷区の「みどりの生命線」と言われる貴重なもの。崖線上には地域風景資産に選定された場所もあり、写真の「旧小坂家別邸と崖線庭園」は「静嘉堂緑地の自然林」や「岡本の富士見坂―岡本三丁目の坂」とつながり、地域風景資産のリンクが楽しめる。

国分寺崖線

H邸

国登録有形文化財　世田谷区第2回地域風景資産

設計：遠藤新／1924（大正13）年

ライトの弟子、遠藤新が設計した近代住宅。遠藤新の設計であることに加え、三軒茶屋一帯が住宅地として開けた初期の住宅として重要とされ、2000（平成12）年に国の登録有形文化財に登録されている。2007（平成19）年度には世田谷区の地域風景資産に選定。花や緑を管理する住民団体の活動も見逃せない。

H邸（三宿）

T邸

国登録有形文化財

設計：山田醇（じゅん）／1927（昭和2）年頃

2007（平成19）年に主屋と門の他に石垣と水蓮池が有形文化財に登録。小田急線の南側の区画整理事業による住宅地に建ち、敷地は仙川に向けて下がる傾斜地にある。中廊下型の平面、南面の幅広の縁側とテラス、ハーフティンバー風の妻面処理等に山田醇の特徴がよく見られる（『田園と住まい展図録』参考）。

T邸（砧）

旧野戦砲兵第一聯隊営（現民団世田谷支部）

かつて世田谷区域を東西に貫く大山道（おおやまみち）沿線には陸軍施設が集中的に配置されていた。丸の内の兵営群は三菱財閥に払い下げられ、オフィス街へと変化していく一方、大山道沿いの青山や渋谷、目黒方面の軍事化が進展。さらに日清戦争を経て明治30年代に入ると騎兵や砲兵の兵営、駒澤練兵場などが造営された（『世田谷往古来今』参考）。この建物は世田谷に残った唯一の陸軍施設である。

旧野戦砲兵第一聯隊営（現民団世田谷支部）（下馬）

世田谷区民会館＋区庁舎と広場

世田谷区第3回地域風景資産

設計：前川國男／1959（昭和34）、1961（昭和36）年、2021年～改築工事進行中

低層の建築群に囲まれた広場を中心とした計画が、戦後の民主主義志向を建築的に表現した庁舎建築として高い評価を受けている。どこからでもアクセスでき、誰でも、いつでも自由に往来できる公共空間。その場所に身を置いてみれば、緑もありヒューマンな広場で、適度なスケールが親近感を与える外部空間となっている。庁舎のケヤキ並木が作る広場の風景は地域風景資産に選定。

世田谷区民会館＋区庁舎と広場（世田谷）

和田堀給水所１号配水池

近代化遺産2800選

円形劇場のような美しい建物として都市景観を形成。設計は日本近代上水道施設に関わった中島鋭治で、「近代化遺産2800選」に登録された文化的・歴史的価値の高いものである。また、建物の各所に協力した建築設計者の意匠上の思い入れが見られる。現在の建物は建て替えとのことだが、世田谷区は自然環境を享受できる緑の拠点と位置づけ、区民への開放を目指すとしている。

和田堀給水所１号配水池（大原）

駒沢給水塔（愛称コマQ）

世田谷区第1回地域風景資産　選奨土木遺産

1924（大正13）年3月に竣工した鉄筋コンクリート造の二基一対の1号塔、2号塔をトラス橋で繋いだ珍しい給水塔。北多摩郡砧村字鎌田の多摩川伏流水は砧下浄水所から駒沢給水所へポンプで送られ、そこから自然流下により東京府豊多摩郡渋谷町に送られた。現在は災害時給水ステーション（給水拠点）として活用。2003（平成15）年に修復された二基の屋上にそれぞれ12個の装飾球が定期的に点灯、地域のシンボルとして親しまれている。

駒沢給水塔（愛称コマQ）（弦巻）

駒沢給水所　第一ポンプ所

選奨土木遺産

1933（昭和8）年に拡張工事で配水池と第一ポンプ室を造設。外壁は腰部分に砂岩系の石張り、上部は黄褐色のスクラッチタイル張り、中央出入り口にはアールデコ調の装飾がされている。開口部は2段の横軸回転ガラス窓だったが現在は消失。内部に4基の配水ポンプが現存し、上部にクレーンのデザインされた受けも現存、腰回りには窯変タイルが張られ、採光による色の変化も考慮されている。

駒沢給水所　第一ポンプ所（弦巻）

土木と建築の協働、その可能性を探る

―駅・駅広を中心とした地方都市のまちづくり事例から「都市・まち」を考える―

都市・まちづくり委員会
委員長
近藤　崇

JCCA×JIA協働シンポジウム　第14回

JIA関東甲信越支部の都市・まちづくり委員会と土木分野の専門家集団であるJCCA（建設コンサルタンツ協会）の土木・建築連携まちづくり専門委員会は、2009年から2019年の間に「誰が景観を創るのか」をメインテーマに協働シンポジウムを計13回開催してきた。日本の美しい景観や魅力的なまちづくりは、土木・建築両分野の横断的な協働なくして実現し得ないという考えのもと、協働の重要性や在り方、今後の展望について研究している。

2年ぶりの開催となった本年2月26日の第14回シンポジウムは、メインテーマをより分かりやすく「土木と建築の協働、その可能性を探る」と変更した。これまでの「景観」というキーワードは重視しつつ、時代の変革期にある現在、私たちの関心を「より身近な空間、より身近なパブリックスペース」へと移して「都市・まち」について議論したいと考えたからである。私たち設計者やエンジニアが日常の活動のフィールドとする都市空間やまちづくり、それらに関わるコミュニティなどを、より居心地が良く人間本位で思考された空間や場としていきたい、そのためのヒントや示唆を得ることを、今後も継続するこの協働シンポジウムの目的としたいと考えている。

駅・駅広を中心とした地方都市のまちづくり事例から「都市・まち」を考える

第14回となるJCCA×JIA協働シンポジウムは、―駅・駅広を中心とした地方都市のまちづくり事例から「都市・まち」を考える―を副題とし、駅まち空間における土木と建築の協働を考える機会とした。

第一部の基調講演では、建築家の乾久美子氏に「多様な主体とまちづくりを考える」と題し、延岡駅周辺整備、宮島口フェリーターミナルなどまちの交通結節点における、建築を超えたまちづくりについて講演いただいた。交通機能の上に人々の居場所を重ね、散りばめていったこと、小さな風景のリサーチから学んだという居心地の良い場所の条件、まちに呼応するスケール感や風景との調和に対する配慮など、その手法や所作について知見を聞くことができた。

続く第二部のパネルディスカッションでは、乾氏に加え、土木サイドから都市設計家の小野寺康氏、行政サイドから前沼津市副市長で国交省都市局都市計画課施設計画調整官の新屋千樹（しんやかずしげ）氏に登壇いただいた。モデレーターは当委員会メンバーでもある建築家の福島加津也氏である。小野寺氏からは、まず市民活動の場として位置付けられるようになった駅前広場の日本独自の発展経緯について指摘があり、実際に手掛けた日向駅、姫路駅、東京駅など駅まち空間の演出やデザインについて紹介いただいた。新屋氏からは、コンパクトシティに関する国の都市政策や、沼津駅周辺で計画が進むコンパクト・プラス・ネットワーク型のまちづくりについて紹介いただいた。ディスカッションを通じ、建築と土木、その他プロジェクトに関わる多様な主体との立場を超えた協働は、人々の快適な居場所を創る上で必要なことであり、ますますそれが求められる時代にあることを確認した。

建築と土木の再融合、今後の展開

筆者が設計に関わるプロジェクトでは、日常的に土木設計者との協働を経験しているが、近代以降続く「建築と土木」という縦割システムのハードルは高く、限界を感じることが多い。しかし居心地の良い場所や空間を創る（＝質の高いパブリックスペースの実現）には、建築と土木の領域を超えて構想することが不可欠である。都市空間は1つであり、世界的な都市間競争が激化する中、より魅力的な都市・まちを実現していくためには、建築と土木の領域を規定する現状システムの再構築を進めて行くべき時代にあると考える。

今回のシンポジウムは「駅まち空間」を題材としたが、次回以降も新たな企画で、引き続き建築と土木の協働、その可能性を探っていきたい。

※2月26日に実施したJCCA×JIA協働シンポジウム第14回は、JIAのYouTubeチャンネルで公開しています。ぜひご視聴ください。
https://www.youtube.com/watch?v=VbKclHuKfEc

JCCA×JIA協働シンポジウム第14回の様子

施主と設計者のコミュニケーション

山崎哲法律事務所
弁護士
安藤　亮

弁護士の安藤と申します。弁護士登録以来、第二東京弁護士会の消費者問題対策委員会・住宅部会に所属し、欠陥住宅問題の研究等に従事してきました。現在では住宅部会の部会長を務めております。

このたび連載させていただくにあたり、どのようなテーマにしようかいろいろと考えました。多数の建築紛争に携わる中で、「事前にもう少し気を付けていれば紛争がここまで大きくなることはなかったのに」と思うことが多いことから、連載のテーマを「トラブルを未然に防ぐために気を付けるべきこと」にさせていただきました。

そして、連載第1回のテーマは「施主と設計者のコミュニケーション」といたしました。

契約書を作成する

建築士として、建築基準法や各種技術基準等に沿って設計しなければならないことは言うまでもないことです。しかし、これらの法や基準に沿ってさえいれば問題がないかというと、もちろんそのようなことはありません。私の経験からすると、施主と設計者間でのコミュニケーション不足がトラブルの原因となっていることが非常に多いと感じます。例えば、「とりあえずこんな感じで設計してくれないか？」と依頼され、何度も打ち合わせを重ね、苦労して基本設計図書を作成したものの、施主が気に入らず、「契約するのはやめた」と言われ、何時間も稼働したにもかかわらず一切報酬を払ってもらえない、というご経験はありませんか？

上記の例において重要なことは、仕事の内容と報酬を合意し、これらを明示した契約書を締結してから業務を開始すべき、ということです。「相手は分かってくれているだろう」と一方的に思い込むことはトラブルのもとです。施主との間できちんとコミュニケーションを取り、形に残すことが大切です。

コミュニケーション不足が建築トラブルの原因に

コミュニケーションを取るなんて当たり前ではないか？と思われるかもしれませんが、コミュニケーション不足が原因で建築トラブルとなることは多いと感じます。例えば、一戸建てを引渡した後、施主が所有している乗用車が駐車場に入らず、はみ出してしまったという相談や、収納スペースに設置する家電などのサイズを聞かなかったために、施主が所有している家電を設置することができなかったという相談を受けたことがあります。このような例について法的に詰めて検討した場合、設計者側の説明義務違反の有無が争点になりますが、それはともかく、毎日忙しい業務を行っている時でも、相手の立場に寄り添い、設計者側が配慮して業務を行うことを心がけることで、トラブルを未然に防ぐことができるのではないでしょうか。

リスク、イメージの説明が大切

また、施主側から、「デザインを凝ったものにしたい」とか、「低予算で抑えたい」などの強い要望があり、その要望を優先させた結果として欠陥が発生するリスクが高い設計が行われる、ということがあります。この場合、施主側がリスクを十分に理解し、その内容を了解したうえでの設計であれば、法的には設計者に責任は認められない、という結論になります。しかし、物事は簡単ではなく、設計者側では十分に説明し、施主はリスクを理解しているだろうと思っていても、(多くの場合建築の素人である)施主はリスクを理解するのは難しく、設計者側と施主側で認識にギャップが生じていることが往々にしてあります。このような事案が裁判で争われた場合、設計者がリスクの説明をしたことの立証がない限り、当該リスクが契約に織り込まれていたとみることはできない、とされています。設計者が「リスクを説明したから理解したはずだ」という話だけでは、裁判官に理解してもらうのは難しいのが現実です。

対処方法

コミュニケーション不足に基づくトラブルを防止するには、「相手は分かっているであろう」と安易に思うのではなく、契約内容や設計内容について充分に確認し、契約書や議事録をそのつど作成するということが極めて重要です。メールで打ち合わせ内容を確認するのでもよいでしょう。

書面化作業をしないことによってより大きなトラブルが発生し、労力や精神的苦痛を伴うことが往々にしてあるので、ぜひ注意してください。

夏目漱石が建築家になっていたら

河野　進

10代終わりの浪人時代、多少時間に余裕のあった時期に、家の本棚の夏目漱石全集に手を出したのがきっかけで、漱石にはまった時期がある。それまでは『坊ちゃん』『吾輩は猫である』など、どちらかと言えば軽い滑稽話を得意とする作家だと思っていたが、『それから』『心』『草枕』など読むうちに、漱石が描く家族、友情、恋愛、社会など多様なテーマについて、自分なりに考えるキッカケになった。深みのある人間観、時代を見通す目の確かさなど、それまであまり考えることのなかった思想や哲学の問題にも目を開かされることになった。

最近読んだ『漱石のデザイン論』(川床優 著) という本で、漱石の複雑な生い立ちと葛藤について再認識することになった。明治の文明開化時代に牛込の名主の家に生まれてすぐに養子に出され、幼少時に家族や友人、周辺の大人たちの中で、さまざまな苦労を経験している。高等学校時代にいったんは建築家を目指した時期があり、「建築ならば衣食住の一つで世の中になくてかなわぬのみか、同時に立派な美術である。趣味があると共に必要なものである。私は愈々それにしようと決めた」(『処女作追懐談』) と書いている。志望動機に挙げている衣食住、美術、趣味などの言葉に親近感を覚える。心を許した親友に「お前は作家になる方が向いている」と説得され、建築家の道を翻意したという。

その後英語教師になり、イギリス留学中に神経を病んで帰国。東京に戻り一高、東大で英文学を教える。38歳の時に『坊ちゃん』『猫』で文壇デビュー。小説、随筆など多彩な文学作品を発表。他方「私の個人主義」(『漱石人生論集』所収) など、聴衆を引き込むユーモアと厳しさを併せ持つ講演を精力的にこなした。43歳で胃を患い50歳で亡くなる。晩年には「則天去私」という「私心に捉われることなく、自然の摂理に従って生きる」という境地を表す言葉を残している。わずか10年間という短期間に残した著作や講演録などの多彩さと充実ぶりは日本の文学者の中でも傑出している。

浪人時代というエアポケットのような時期に漱石に出会ったことが、法学部入学後に学士入学で建築に進路を変えたことや、その後始まった学園闘争の渦中に、育った環境が異なる仲間や先輩たちと議論を交わす際に、それと意識しないうちに漱石の考え方に影響を受けていたことがあったように思う。

卒業後は学生時代の指導教官である大谷幸夫先生の主宰する設計事務所に入れていただき、建築・都市設計のイロハから教わった。建築家大谷幸夫の設計思想を表すものとして「個即全」という考え方がある。1970年代に建築・都市の計画論で主流だった、全体から構想して部分を考える方法論に対し異論を唱え、「京都国際会議場」「川崎河原町団地」などの計画論を通じて、会議場や住戸などの単位を並べ・重ねることから建築、都市を構築する方法として、「部分から全体へ」という計画論を提起した。個を大事にすることから全体が見える、個の中に全体がある、とする趣意である。これは漱石が「私の個人主義」で述べた、「倫理に裏付けられた個人と国家の両立こそ肝要」とする考え方に通じるものがあるように思う。

大谷研究室を出て事務所を始めたばかりの頃、大谷さんを通じて建築家鬼頭梓さんから建築家協会 (JIA) へ入会の誘いをいただいた。欧米では古い歴史を持つ建築家職能と資格制度を参照して、日本の建築士制度を見直すべきとする運動が、当時のJIA活動の重要な柱の1つであった。鬼頭委員長が引っ張る職能委員会へ参加したことで、それらの活動を通して、諸先輩からは建築家職能の在り方や倫理の重要さを教えていただいた。もし漱石が若い日に目標にしたことがある「建築家」になっていたら、同じ英国留学の経験を持つ13歳年上の辰野金吾と一緒になって、日本の伝統と文化に根差した、国際的にも通用する建築・都市そして建築家を作るべく、先頭に立って活動したのではないかと夢想する。

若い日に読書を通じて人生を考えるキッカケを貰った漱石への、ささやかなオマージュである。

左:『漱石全集』第九巻ケース (岩波書店)
中:『漱石全集』第九巻表紙 (岩波書店)
右:『漱石人生論集』カバー (講談社)

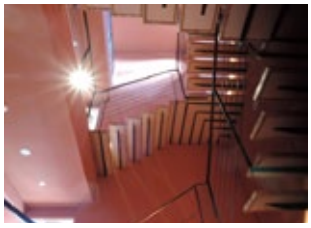
階段の構造

小倉直幸

「階段は何かちょっと面白いことをやりたいと思ってるんです」。基本設計時の打ち合わせで建築家がこんなことを呟くときほど嬉しいときはありませんでした。

私はこの年始より独り立ちしたばかりの構造設計者です。アトリエ時代の師を含めて構造家と呼ばれる諸先生方の発想力にはまだまだ敵いそうにありませんが、拾い集めたアイデアは蓄積して煮詰めて発酵させて……ということを地道に行ってきました。そして、隙あらば発酵させたエッセンスを担当物件のどこかに生かせないかと……そんなことをいつも考えていました。建築の根幹の構造にはなかなか口出しできなくて妄想するばかりでしたが、階段などの2次部材の構造にはボスも口出しをしてこなかったので、任された打ち合わせの中で構造アイデアを聞かれたりすると気持ちは昂ったものです。帰ればその検討ばかりして本業の解析が遅れて怒られたこともありますが、そんなことをする余地があったから何とかやってこれたのかもしれません。

そんな階段たちには、構造設計をしながら手描きのスケッチやアイソメをたくさん描かせられ、手計算もたくさんさせられました。ややもすれば解析ソフトをいじるばかりになりがちな分野でありながら、この時間こそが独り立ちの道を開いてくれたのだと思っています。とはいえ、どれだけ頑張っても新しいシステムは絵や計算だけでは完全に挙動を把握しきれないこともあり、構造詳細を描いた後にひやひやしながら検査に赴き、やはり揺れるからと補強方法を考えたり……そんなこともありました。原因がわかれば大半は物理的に当然のことであり、やはり計算で不安が残る場合は模型実験等を行ってでも実現象の検証をすることが有効であるとつくづく思い知らされました。階段というシンプルな構造体は意匠にも構造にも程よいスパイスになるようです。



浮遊感のあるスチール片持ち廻り階段

現場での構造検証の様子

環境をつくり持続させるコモンズ

金野千恵

2011年、東日本大震災のあった春、大学の博士課程修了と同時に独立し、自ら設計活動を始めた。生活を支えながらも隠れていた側面が顕れ、自分たちの暮らしを構築し維持することの不透明さに気づき、大きな違和感を抱いて社会へ出た。2020年代、私たちはふたたび抗いようのない社会変化のただなかに在り、建築やその周りの環境をつくることはどんな意味を生み、役割を果たすのか、という問いをいっそう強めている。

独立して11年を経たこの春、6年半関わったプロジェクト「春日台センターセンター」が竣工し運営が開始された。高齢者の住まいやデイサービス、障がい者の活動拠点や働く場、子どもの学び舎などを含みながら、これらの目的を持たない人も立ち寄り、愉しみを共にできる環境である。この時間のなか、計画を白紙に戻し、まちを歩き、多くの人と会って話し、当然、規模やプログラムが変わるたびに案を思考してきた。振り返ると合理性や効率性とは対極にある回り道もあったが、その時間のなかで施主と私たちは共に学び、目指す暮らしの環境の方向性を定めてきた。さらには、ワークショップを通して出会った地域の資源や確かな活動の数々は、オープンして1ヵ月半にしてこの環境をすでに力強く支えている。多様なプログラム、空間の内外、制度の内外を越境する大屋根は、日々刻々と変化する人々の活動を浮かび上がらせ、各人が少しずつ知恵や力を出し合うことでこの環境をつくり出し始めている。このような共同の環境づくり、持続させようとする営為は現代のコモンズともいえ、少なからずこの先の私たちの暮らしを支えてくれるのではないかと感じている。

「春日台センターセンター」　© morinakayasuaki

交流委員会

2021年度の活動を振り返って

―交流委員会活動の課題と今後の活動について―

交流委員会委員長
相野谷誠志

今回は、2021年度の交流委員会全体の活動について、交流委員会 広報部会長の深滝准一委員、長坂典和副委員長と私で総括した内容を掲載します。交流委員会の課題と活動について、正会員の皆さんに共有していただき、今後の活動にご理解とご協力をいただきたいと思います。

次頁では、交流委員会のことを改めて知っていただくために、構成や活動内容などを記しました。また、2年前から行っている正会員向け「オンライン技術セミナー」の概要も掲載しますので、活動内容の参考にしていただければと思います。

2021年度の活動を総括

正会員の新規参加を募集

相野谷●2021年度の交流委員会の活動や今後の活動方針について、それぞれご意見を聞かせてください。

深滝●私は15年間交流委員会の広報部会に参加していますが、次の担い手となるJIA正会員の委員参加がないので、新しいアイデアを持った方にぜひ参加してもらいたいと思っています。

長坂●今までの委員は、設計事務所内で前任者から引き継ぐのが普通でした。ただ今は、事務所内で後任者を探しても、若いスタッフは多忙な業務をこなしているため、なかなか見つかりません。そのため、正会員が高齢となり、世代交代ができにくくなっています。

それを解決するためには、できるだけ幅広い正会員や若い設計者に交流委員会の活動を知ってもらい、実際の委員会活動に参加してもらう必要があると思います。それには、やはり今活動している委員1人1人が地道に声を掛け、活動内容を伝えていくことが最重要だと思います。

深滝●正会員には、大手設計事務所の方もいますが、個人で設計を行っている方も多くいます。個人事務所の場合は、法人協力会員（メーカーなど）との交流も少なく、実際に設計の中で、製品の詳細な情報の確認に困っている方もいると思います。そのような方に、交流委員会の活動内容や情報入手などの方法を伝えられれば、委員会活動の理解や協力も得られるのではないでしょうか。

ホームページ更新やオンライン技術セミナーを継続

相野谷●交流委員会のホームページは、改編など何か新たなアイデアはありますか。

深滝●この2年間は、各グループ、施設見学会など通常のイベントが実施できなかったため、新たな記事の材料がなく、ホームページの更新が思い通りにできませんでした。今後新しいコンテンツを考えて、ホームページの内容を更新する必要があると考えています。

具体的には、現在進めている新規加入企業（法人協力会員）の紹介記事の掲載や、すでに交流委員会に入会している企業の紹介を協力会員名簿とリンクさせて、正会員が必要な情報（会社概要・製品情報・担当者への連絡先）をすぐに入手できるようにすることを検討しています。

また、「オンライン技術セミナー」の開催情報などを載せたメルマガ（正会員へ配信）を定期配信できるように掲載記事を検討して、メーカーの情報発信（新製品紹介や現状での設計者に向けた情報配信）を行えるように検討したいと思っています。

相野谷●それから、2021年度は近畿支部で法人協力会員とともに活動している方と交流する機会があり、近畿支部のホームページ中の「カタリスト」という企画に我々の活動を紹介した記事を掲載していただきました。また、正会員と法人協力会員が共同で記事を作成している活動を紹介してもらったり、これからの活動のヒントを得ることができました。

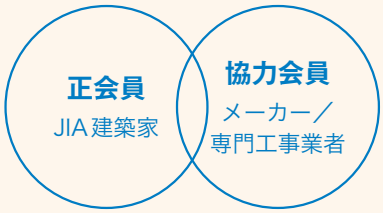
長坂●他支部との交流は良い企画ですね。ただ、どのような活動をしているのか、まだあまり見えていないので難しさもあります。

深滝●いずれにしても、まずは「オンライン技術セミナー」を正会員の方にもっと視聴してもらい、セミナーを開催してくださる法人協力会員の方たちにとって有意義な情報発信の場となるように努力すること。そして、オンライン環境を利用し、情報発信や共有が簡単にできる、数多くの会員にとって有意義な活動にしていくことが大切だと思います。

相野谷●今後も、正会員と法人協力会員がより交流を図れるよう、活動を続けていきましょう。

関東甲信越支部「交流委員会」とは

交流委員会は関東甲信越支部の中にあり、正会員と法人協力会員が交流を図る核となっている委員会です。支部の正会員（建築家）と法人協力会員（建築生産に関わるメーカー、専門工事業および関連業種など）が、共に良い建築をつくるパートナーとして、相互研鑽、技術や情報交流を図り、建築技術ならびに建築物の質の向上発展を目指すことを目的としています。



交流委員会の構成

正会員・専門会員等…… 26名

法人協力会員…… 146社

主な活動内容

運営に必要な通常の会議や部会の他に、主な年間行事として、交流セミナー（正会員向けに幅広く研修を行うセミナー）、フレンズカップ（親睦ゴルフ大会）、技術情報シートの編纂（支部会報での技術情報広報活動）、交流大会（年度末に行う年間活動の締め）などを行うとともに、支部行事に積極的に参加しています。ここ数年は新型コロナウイルスの影響で思うように活動できないため、「オンライン技術セミナー」を開催し、メーカーの情報を配信しています。

法人協力会員

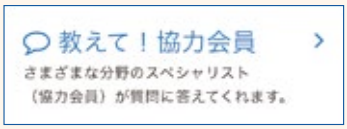
法人協力会員企業は職種によって7グループに編成されています。

Aグループ　仮設、土木、杭、地盤調査、コンクリート、鉄筋、鉄骨
Bグループ　防水、左官、塗料、吹付
Cグループ　窯業・金属・石材などを中心とした外装材メーカー
Dグループ　内装工事、内装材、家具、エクステリア材
Eグループ　電気設備の施工会社／メーカー、搬送設備メーカー
Fグループ　空調衛生設備工事会社、設備機器メーカー
Gグループ　CAD・情報処理、教育・出版

協力会員名簿や「教えて！協力会員」をご活用ください！

JIAではさまざまな分野のスペシャリストが協力会員になっています。商品について確認したいことなどがある時は、交流委員会のホームページにある**「協力会員名簿」**を利用して協力会員にぜひお問い合わせください。
同じような製品を扱っている会社が複数あり、どこに問い合わせすればよいか迷う場合は、同じく交流委員会のホームページの**「教えて！協力会員」**が便利です。入力フォームより質問をすると、協力会員に一斉に配信され、回答可能な協力会員が答えてくれるシステムです。これにより、複数社から情報を入手することも簡単にできます。ぜひご活用ください。

交流委員会HP



◀◀◀こちらのバナーより

●これまでに開催した交流委員会「オンライン技術セミナー」

	講演企業	講演テーマ	開催日
第1回	LIXIL	浴室設計への提案	2020年10月27日
第2回	リリカラ	壁紙のデザイン インクジェット壁紙とマテリアル	2021年2月26日
第3回	ダイソン	製品紹介：照明　ハンドドライヤー	2021年3月3日
第4回	大日化成	建物緑化が建物にもたらす影響	2021年5月21日
第5回	共同カイテック	設計者のためのOAフロアの実務知識	2021年5月28日
第6回	フッコー	環境機能材としての透水性舗装材について	2021年6月11日
第7回	GSユアサ	公共用蓄電システムの動向について	2021年6月3日
第8回	パナソニック	ライティング＋αで変わる建築	2021年8月30日
第9回	パナソニック	LED照明へのリニューアルについて	2021年9月6日
第10回	日本製鉄	実績から考える　―チタンはなぜ建築に使われるのか―	2021年9月10日
第11回	能美防災	BCP（事業継続計画）からみた重要施設への安全対策	2021年9月17日
第12回	スミノエ	建築資材における持続可能な開発目標（タイルカーペット編）	2021年11月24日
第13回	ニッタン	非常時の避難誘導をサポートする位置情報システム（屋内位置情報システム）及び業界最小クラスの共同住宅用感知器	2021年12月9日
第14回	美和ロック	防犯に優れた錠前と最新の住宅向用　非接触システム	2022年4月19日
第15回	日本BAC	建築デザインの自由度を高める冷却塔	2022年4月21日
第16回	ナブコシステム	自動ドアにおける「SDGsへのアプローチ」と事故リスクの“今”と“これから”を踏まえた設計ポイント	2022年4月27日

今後も「オンライン技術セミナー」を継続していきますので、ぜひご参加ください。開催情報は、JIA関東甲信越支部ホームページ「イベント情報」やメルマガでお知らせします。

建築主の声を聞き逃さない、想いを汲み取る

飯沼竹一

分かりやすいHPづくりが第一歩につながる

2001年に事務所をスタートした時は、地縁や縁故など何も持ち得ない状況で、とにかくがむしゃらに人に会い、会社訪問し、何か仕事につながることはないか右往左往していました。時間があるのでコンペにもかなり参加しましたが、空回りを続けていたのを思い出します。そのうちに、自分の考えを伝える手段として、HP(ホームページ)に重点を置くことに方向を変えました。それが功を奏し、徐々にHPを見たという問い合わせが増えてきました。

専業の設計事務所を営むためにHPはとても有益なツールになりました。それだけにこのHP製作にはかなりの労力、費用をつぎ込んできました。現在のHPは3作目になりますが、1番目のHPはインターネットに詳しい友人と一緒に試行錯誤を繰り返しながら運用した手作り感いっぱいのものでした。今では考えられないですが通信速度も遅く、これを見て問い合わせてくれた建築主には本当に感謝でした。その後、自前でのHP運用が負担になり、現在のHPを製作してくれているWebデザイナーにお願いしました。この方は「カッコいいHPなんて掃いて捨てるほどある、その数多の中から一般の建築主がどうやって飯沼さんの事務所を選ぶの？カッコいいだけのHPが欲しいのなら他を当たって…」と。これには参りました、お任せするしかなかった(笑)。

受注の用途別の割合は住居系が7割、店舗、クリニックなどが3割です。官庁物件やデベロッパー、施工業者からの仕事はありません。住宅に限ればHPからの相談者が8割くらいになります。独立から22年になりますが、このように事務所を維持できていることは有難いことです。

ファーストプランはスタディ模型を使って説明

住宅の場合、相談者がHPで事例を確認し、考え方を読み込んで来られるので、ミスマッチはほとんどありません。初めの面談では1、2時間ほど設計の進め方や掛かる費用などを説明し、建築主からざっくばらんに家族や暮らし、趣味嗜好などの話をしてもらいます。双方で合意できればファーストプランを作成することにしています。計画する土地が決まっている場合は概ねプラン作成の依頼を受けます。後日、敷地の調査検討をし、詳しいヒアリングを実施し4週間くらい時間をいただいて計画案をプレゼンします。土地探しからですと土地が見つかるかのご縁次第になりますから成約率が低くなります。

プレゼンは必ずスタディ模型を作成し、それを見せながら計画案を説明します。スケッチや3Dなども併せて使うこともありますが、やはり模型で説明する方が一般の方には理解しやすいようです。その後、正式に設計契約するか、ファーストプラン作成の費用を支払ってそこまでで終了するか、建築主の決断になるわけですが、この時点で契約に至らなかった事例はこれまで数例しかありません。

ライフスタイルや与条件、想いを汲み取りバランスよく

建築主が「未来の家」をイメージするとき、それを言葉に表すことはなかなかできません。もともと「人が人に伝える」ということは難しく、まして自分が求める建築を適切に説明できる人は稀でしょう。それでもどの建築主もその人なりの言葉を持っています。建築主に寄り添うように耳を傾け、想いを聞き逃さず、目に見える条件だけでなく潜在的な要望を引き出すことを大事にしています。それが建築主の求める住宅を提案することにつながります。これを見誤って受注できなかったことも数回あります。何が拙かったのか自問自答すれば、やはり相談者の想いを汲みきれず、バランスを欠いていたことを痛感します。

HPはツールになりますが、建築主の気持ちを掴むのはやはりリアルでの対話とそこから導き出される要望や暮らしをいかにバランスよくカタチにするかです。建築主にとっての快適な住まい方、大切にしている価値観や美意識を整理し、豊かさを日々感じとれる住空間を探求し続けたいと思います。

ファーストプランの縮尺1:50のスタディ模型。あまり色や素材感は出さないことが基本

流れる糸

片倉隆幸
1981年芝浦工業大学卒業／1983年芝浦工業大学大学院修了

師との出会い

学部学生の時から建築家というプロフェッションに憧れていたので、ひたすら建築に没頭した。住宅部会の話等も会員だった故みねぎしやすお先生から当時からお聞きしていた。非常勤講師では故斎藤孝彦先生もいた。三井所清典先生にもお世話になった。直接の指導は故石川洋美先生で、温泉地計画等のお話に影響され、卒業設計に臨むことになった。いずれもJIAの大先輩方である。

卒業設計

卒業設計では、高度成長期に接待の場として乱立したホテルの様相に、ある秩序を与えるため、技術的にも極めてマイナーな時期に発展してきた熱海の湯店を基本とした家並みの発生のルールのようなものを発見しようと、湯店のまち並みと道筋を歴史的な考察からひも解いていたように思う。かつて何代にもわたって流れ続けた糸、その場は、かつてあり続けた「もの」が絶えず「未完」の永遠を生き続け、究極的に到達すべき「様態」へ、持続的、恒常的な希求を内在させているのかもしれない……建築と土地に関する構造的な概念の発想をさらに精神のレベルへと飛躍……伝統建築に受け継がれたボキャブラリーに含まれる特殊な意味に支えられた象徴性と現代が要求する観光地熱海の新しい価値や機能を求めた。海と山の風景の間に生まれる原風景、ファミリーで楽しめる心地良い熱海のまち並みの再生を考えた。モノトーンA0判17枚……饒舌で観念的な学部時代であったように思う。

修士設計

大学院時代はみねぎしやすお研究室に在籍した。住宅の研究にも取り組んだが、学部時代から直接指導を受けた石川洋美先生の信州の温泉の調査にも参加させていただいた。その頃から信州に戻る気持ちでいた。

修士設計は当然のように諏訪の片倉館と隣の諏訪市美術館を統合した片倉館クアスクエアーの再生に取り組んだ(片倉館を設計した森山松之助はフランク・ロイド・ライトとほぼ同じ年であり、2人に接点があったのか歴史家に聞いてみたい)。片倉館の魅力は何と言っても醸し出すディテールと全体構成の豊かさにあった。湖への緊張した視線の形象化として、素材は片倉館にあるレンガ造を用い、家型と塔の情景を基本とした具体的な修景を提案した。学部時代に比べると寡黙な表現だが、リアリティーのあるものだった。卒業設計も修士設計も後輩の手伝いがあり成し遂げることができた。僕もそうだが、先輩の手伝いは教師からの学びとは違う実感がある。

左：卒業設計「黎明」
右：修士設計「片倉館クアスクエアー」

現在

今は信州に住み、建築家として仕事ができる喜びを心から感じている。斎藤孝彦さんが提唱したプロフェッションの5原則(注)を今の時代の中でどのように自分なりに捉えて生きていくか……大きな課題だが、特に住宅を専門に設計する立場として、「新しい公共とは何か？」を考え続けている。住まいの修景も古いものから最近の建築に広がり、新築においてももちろん周りとの関係が大切だ。境界を曖昧にする建築と外部空間、歴史と現在、現在と未来、僕と社会が、心の奥深くで交差する日常。たまたま自分がその順番を受け継ぎ、表現させていただいているのだという責任感が、心を奮い立たせる。寿命の長い建築を目指して、すべてのものへのいたわりと感謝は続く。

学生の教育にも関わっている。今我々に必要なことは何か？ 今社会に必要とされていることは何か？ 長く追いかけるテーマや思想を育ててほしいと思う。建築家としてこの社会で何ができるのか？ 問いかけは永遠に続く。

最後にリカルド・レゴレッタの文章から。

「建築家は特定の形、材料そして、いわゆる様式に、こだわるべきではない。心が自由であることによって、ひとつひとつの建物は、その置かれた文化、社会に属するものとなり、その目的に奉仕するものとなる。建築はその時代に所属すべきであると同時に、気品をもって年を重ねることもできるはずのものであり、それによって、それは日々により楽しく美しいものとなっていく。」

情熱だけの学生時代から少しずつ目指すところへ……素直に考え、できる限りの表現をしていきたいと思う。

(注) プロフェッションの5原則：専門性、公益性、非営利性、個人性、団体性

これからの挑戦

JIA 学生会員　**新村恵太**
芝浦工業大学建築学部3年

こんにちは。学生会員の新村恵太です。

私は現在、芝浦工業大学の3年生で、大学に入学した当時は新型コロナウイルスという未知のウイルスが流行し始めたときでした。高校生から夢見ていた大学生活というものが、オンライン授業に移行され、最初の1年間は大学にほとんど行かずに終わってしまいました。大学での友だちも数人しかおらず、先輩とのつながりも皆無の状態でした。

そこで出会ったのが、今参加している学生の会@joint（ジョイント）です。JIAの関本竜太さんと交流があり、大学1年生の春休みに関本さんからJIAの学生団体があることを紹介してもらいました。こういった学生団体に積極的に参加することが性格的に苦手ではありましたが、大学で何もできずに横や縦のつながりがない状況を脱却したいという思いがあり、参加の決断をしました。

自分が在学している芝浦工業大学の先輩も参加しており、さらに他大学の先輩、そしてJIAの正会員の方との交流もあり、とても刺激のある場所だと感じています。この「@joint」という名にふさわしく、たくさんの「つながり」があるのが最大の魅力です。

木組展で見た寺院建築の木組

この2年間の大学生活を経て感じたことは、「今ある環境を受け入れ、その環境を最大限に生かして自分から挑戦していく」ことです。コロナが収束するのを待っていては何もできずに終わってしまう。この環境だからこそできることを、自分で探して挑戦していくことがこれから必要になっていくのだと思いました。@jointに入ったのもひとつの挑戦だと思っています。

今は建築学生として大学で勉強をしていますが、実家はお寺です。兄がいるためお寺を継ぐ予定はありませんが、実家を建築という視点から支えたいと考えています。実家が歴史あるお寺という珍しい環境を生かして、大学在学中に自分の手で歴史的な観点から研究をして、将来的には、廃れつつある寺院建築などの伝統建築の保存修復に関わりたいと考えています。

これからも自分から挑戦していくことを大切にし、恵まれた環境である@jointを最大限に生かして新たな挑戦を続けていきたいと考えています。

自身への手紙から

JIA 学生会員　**榎本海月**
日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 1 年

「だから俺は建築をやりたい、誰がなんと言おうとやるだけやってみたい」。関東の桜が散り始めた頃、卒業設計がひと段落した私はようやく部屋の片付けを始めていました。これはその時偶然見つけた手紙に書かれた最後の一文です。

高3の夏、私は卒業後の進路についてある葛藤をしていました。今思えばくだらない話なのですが、「夢を追って建築学科に入るのか」「学歴を重視して某有名私立大学に入るのか」という選択に悩乱していたのです。熟考の末、ルーズリーフを手に取った私はその時の想いをここに綴り、その日“建築の道で生きる”と決意したのです。そんな自身への手紙から、昨晩は建築を学び始めてからの4年間を振り返っていました。そこで今回は、私が学部時代どのような想いで建築と向き合い、設計をしてきたのか執筆させていただきます。

いつからか街を歩いていると、「時代の変化に伴って淘汰されてゆく誰かの居場所」に目がいくようになりました。狭い路地裏に隠れた小さな居酒屋で会社員が飲み交わしていたり、雑草だらけの空き地で子どもたちが基地を作っていたり、そういう些細な場所が豊かな日常を描いていることに気づいたのです。同時にそういう居場所が知らぬ間に姿を消していることにやるせなさを感じていました。そこで、そんなやり場のない感情を設計課題に取り込み提案をするようになったのです。私の設計課題はある意味、読者に向けた手紙（メッセージ）です。映画が観るものの心を動かし、新たな一歩を踏み出すきっかけを与えてくれるように、私も消えゆく誰かの居場所をもう一度考え直すきっかけを与えたい。

卒業設計「大磯海街再考」1F平面図

自身への手紙

卒業設計では地元大磯の海街再生に取り組みました。高速道路の開通によって失われつつある大磯の海と暮らしの関係から、純粋にこの町への想いを綴った提案です。夏頃に大磯町で展示会をしていただくことになりそうです。自身の提案がこの町の人々にとって「海街暮らし」を考え直すきっかけになったことを今とても嬉しく思っています。

今後もJIA学生会員であることを活かし、正会員の皆様と関わりを持っていけたら嬉しく思います。引き続き学生の会@jointをよろしくお願いします。

■今後は学生の会@joint（ジョイント）の活動を紹介していきます。

広報からのお知らせ

退任の挨拶

「協働のかたち」を走り終えて

2021年度『Bulletin』編集長
関本竜太

編集長として担当させていただいた2021年度の『Bulletin』では、「協働のかたち」という年間テーマを据え、これまでにない対話形式によって特集記事をまとめさせていただきました。

年間の編集方針を決めるにあたっては、背伸びをせず、自身の経験と体感に基づいたものにしないとモチベーションが続かないだろうという予感がありました。先の対話形式は、私自身が興味を持つ相手から、引き出したい内容をピンポイントで引き出せるという意味においては非常に有効な手段だったと感じています。

本特集においては私のこれまでの人脈を総動員し、また春号では会田副編集長のお力もお借りして、なんとか年間4号をまとめ上げることができました。

また2021年度の裏テーマには「学生活動への支援」があったことにお気づきだったでしょうか？　本稿の左頁に展開しているコラムがそれにあたります。また「卒業設計をふりかえる」という新連載も、この流れに乗せたものです。結果としてこの1年でも多くの学生会員が入会し、「@joint（ジョイント）」という学生団体も発足しました。

このバトンは今年度編集長に就任される望月さんにつなぎたいと思います。この1年の皆さまのご愛読に感謝申し上げると共に、記事をまとめ上げて下さった南風舎の八木さん、広報委員会の皆さまのご協力にも心より御礼申し上げます。　〈リオタデザイン〉

新任の挨拶

施設設計を年間テーマに

2022年度『Bulletin』編集長
望月厚司

今年度の編集長をさせていただきます、望月厚司と申します。

令和に入りあっという間に4年になりました。まだまだ、新型コロナも予断を許さないように感じています。実際に相対しての肌間で打ち合わせができない場面もあり、もどかしく感じていますが、オンライン会議にも少しずつ慣れてきました。今までは、遠方で会うことが大変な人ともグッと近くになり、電話では伝わりにくいこともオンライン会議で画面を共有することで、映像で伝えながら密な打ち合わせもできるようになりました。

さて、今年度の『Bulletin』は、「施設」をテーマに、そこを利用する人、働く人の思いと建築の設計にかかわる人の思いに注目しようと思います。

少子化、高齢化に伴い人口減少などの影響から複合的にコミュニティの在り方が変化していこうとしています。高齢者が4割を占める人口比率になったときに、生活の様式変化や施設の在り方が問われてくるのではないでしょうか？　新型コロナが変えたコミュニティの在り方、その先の少子高齢化人口減少が変える社会などをテーマに特集を組んでいきたいと考えています。

若輩者で、拙い編集長ではございますが、何卒温かい目で見守っていただければ幸いです。1年間よろしくお願いいたします。

〈芝建築設計事務所〉

今年の夏こそやりたいこと

■行動制限もゆるやかになってきたので、マスクなしで楽しめるところに行きたいです！かつ涼しいところ…やっぱり北海道ですかね？（関本）

■海のアウトリガーカヌーをやってみたい。チームワークの緊張感と全身の筋力使いは懸念の運動不足解消にぴったりなはず！（伊藤）

■今年の夏で我が家の猫ちゃんたちも2歳。実家の母とご対面させてあげたいな^_^（中澤）

■長い間荒れていた庭をやっと整備できて、5月に枝豆、ナス、トマトを植えたので、3ヵ月後には、たわわに実った野菜を満喫したい。（望月）

■部屋の模様替えを今度こそ…！アイデアだけが先走りしているので、実現させるために夏休みに行動しようと思います！（長谷川）

編集後記

■今年の年賀状に落ち着いた頃お会いしたいと書いてあった、かつて親しかった後輩との久しぶりの再会を実現したいと思います。（佐久間）

■ほんとは静かに寺社仏閣めぐりなどしたいけれど、小さい子供がいると難しいので、行けるところでよいので旅行したい……。（会田）

■フィルム一眼レフカメラで思いっきり撮影したいです。でも小さいファインダーを覗いて上手くピントが合わせられるか……。（市村）

■まちを熱気に包む地元の夏祭り。今年は開催されるだろうか。団扇片手に出掛けたい。（竹内）

■毎年暑さに負けてインドアなので、今年こそは活発にアウトドアを！最近流行りのグランピングなんてのもやってみたいです。（井筒）

編集　：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長　：市村宏文
副委員長：中澤克秀
委員　：会田友朗・望月厚司・関本竜太・伊藤立平・竹内祐一・佐久間達也・長谷川理奈
編集長　：望月厚司
副編集長：関本竜太
編集ワーキングメンバー：広報委員＋吉田満・小倉直幸・井筒悠斗・知見徹摩・立石博巳
編集・制作：南風舎

Bulletin 292　2022 夏号
発行日：令和4年6月15日
発行人：大西摩弥
発行所：公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 協進印刷

■JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
・（公社）日本建築家協会（JIA）　http://www.jia.or.jp/
・JIA関東甲信越支部　https://www.jia-kanto.org/

■ 定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2022

人と、技術と、情報と。すべてはお客様のために。

私たちにしかない事業領域を深耕することで、
新たなベンチマークとなることを目指します。

私たちフジモリ産業は昭和26(1951)年に、アスファルト製の床材「アスタイル」の
販売会社・フジモリ建材株式会社としてスタートしました。

以来、一貫して変わらず、お客様のニーズにお応えするために常に最善を尽くすべく、

「お客様がフジモリ産業に求めるものは何か？」
「社会が求めるものは？」
「それに応えるために何をすべきか？」

を問いかけてきました。そして他社にはない優れた商品開発にこだわり、
新しい商品を他社に先駆けてお客様、あるいは市場に提供し続けてきました。

また、それぞれの事業分野に目標とする企業があり、
肩を並べるために日々努力を重ねてきました。

その結果、建材・土木・化成品という事業と、各事業に密接に連携し、
世界を視野に入れた国際事業が、ひとつの企業の中に存在する例はほかにはなく、
ここに私たちにしか出来ない事業展開があるという想いを強くしました。

これからはただ目標とする企業に追いつこうとするのではなく、
私たちにしかない事業領域を深耕することで、
私たち自身が新たなベンチマーク(基準・標準)となることを
目指していきたいと思います。

fujimori